平成２５年度

岩手県普及活動年報

平成２６年５月

岩手県中央農業改良普及センター
県域普及グループ

は　じ　め　に

本県の農業改良普及事業に対しまして、生産者、関係機関・団体を始め多くの方々からご支援並びにご協力を頂いており、心から感謝申し上げます。

農業改良普及センターでは、農業の担い手の育成や技術的な課題解決、生産組織の体制強化の取り組みなど、様々な普及活動を展開していますが、各農業改良普及センターが実施したこうした普及活動の主な成果を、毎年「普及活動年報」として取りまとめています。

県では、平成 25 年度を東日本大震災津波からの「復興加速年」と位置づけ、被災地の農業の一日も早い復旧・復興を目指して取り組んできたところですが、農業改良普及センターにおいても、被災地の営農再開に向けた組織づくりや園芸振興に取り組むとともに、福島第一原子力発電所の事故に伴う放射性物質による影響を低減するため、牧草を中心に除染や吸収抑制対策の検証等を進めてきました。

一方、近年の少子・高齢化に伴う担い手の減少、産地の弱体化への対策も喫緊の課題であり、集落営農組織を含む意欲ある経営体の育成や経営体の経営多角化を支援すると共に、生産性・収益性の向上や生産組織強化による産地再生を進めるなど、平成 23 年に策定した「岩手県民計画第２期アクションプラン」及び「普及指導計画」に基づく取り組みも並行して実施してきました。

また、平成 25 年は、３月の暴風雪、４月初旬の爆弾低気圧による暴風雨に始まり、５～６月の少雨による県北畑作地帯・県南部の旱魃、7 月以降は台風や前線の影響による大雨、長雨が続き、年が明けてからも２～３月の暴風雪に見舞われ、農作物、施設等に大きな被害がもたらされました。普及センターにおいては、気象災害への技術対策を逐次周知するとともに対策支援を実施してきましたが、残念ながら水稲を除く多くの品目で収量が平年を下回る結果となりました。しかし、こうした中でも、耐冷性の強い水稲品種が普及し障害不稔が回避されたこと、６月の少雨期間に点滴潅水装置の効果が発揮されたことなどの事例もあり、技術指導の力が発揮された成果と自負するところです。

関係各位におかれましては、この「普及活動年報」の成果を事例として、各地で農業・農村の発展に向けた活動の参考にしていただければ幸いに存じます。また、我々普及組織にあっても「普及活動年報を作っておしまい」ということにならないよう、実施した農業改良普及センターに止まらず、全県的に普及・発展させていく努力が必要と考えています。

国においては、昨年 12 月、農業を産業として競争力のあるものに強化するための「農林水産業・地域の活力創造プラン」を策定し、プラン達成のための様々な施策を打ち出してきており、まさに農政の大転換の時代を迎えています。こうした時期だからこそ、普及組織の技術力、情報、コーディネート力を発揮して、意欲を持った生産者や集落が、希望を持って農業に取り組み、地域農業・農村が将来にわたって維持発展できるよう支援して参りますので、関係各位には今後とも一層のご支援とご協力をお願いいたします。

平成 26 年 5 月 20 日
中央農業改良普及センター
所長　　赤 坂 安 盛

目　　次

Ⅰ　気象経過と農作物の生産概況　1

1　平成25年1月から12月までの気象概況 …… 2

2　農作物の生育概況 …… 7

Ⅱ　普及指導活動の成果　17

1　「意欲と能力をもった経営体の育成」に対する支援　18

新規就農者の確保育成に向けた支援の取り組み …… (盛岡) 18

関係機関との連携による新規就農者支援 …… (奥州) 20

一関地方新規就農者トータルサポートシステムの実施 …… (一関) 22

新規就農者の確保・育成に向けた取り組み …… (二戸) 24

気仙地方農村青年クラブ連絡協議会の活動 …… (大船渡) 26

リーディング経営体の育成 …… (中央地域) 28

認定農業者の経営力向上支援 …… (奥州) 30

宮古地域園芸モデル経営体の育成 …… (宮古) 32

集落営農組織の支援手法改善サイクル構築 …… (中央県域) 34

集落営農組織の法人化支援 …… (中央地域) 36

集落営農組織の育成 …… (中央地域) 38

関係機関連携による集落営農組織の法人化支援 …… (奥州) 40

集落営農組織に対する野菜生産安定化の取り組み …… (一関) 42

釜石大槌地域におけるマスタープラン策定・実践支援 …… (大船渡) 44

水稲生産者組織の育成・活動支援について …… (宮古) 46

久慈市大川目地区の集落営農組織育成 …… (久慈) 48

2　「消費地から信頼される産地の形成」に対する支援　50

水稲優良種子生産に向けた取り組み …… (奥州) 50

水稲品種が混在する条件下での斑点米カメムシ類防除適期の検討 …… (一関) 52

広田半島地域の水稲生産機械化体系の検討 …… (大船渡) 54

久慈地域における低コスト技術導入と水田利用技術支援について …… (久慈) 56

需要に応じた小麦の高品質安定多収栽培 …… (盛岡) 58

ハトムギの単収向上に向けた改善策の検討（追肥効果の確認） …… (中央地域) 60

キュウリホモプシス根腐病対策技術の検証 …… (中央県域) 62

ほうれんそうは品質が大事（品質向上対策取り組み事例） …… (中央県域) 64

ピーマンのタバコガ類発生予察に基づく効果的防除の取り組み …… (中央地域) 66

ねぎの安定生産に向けた支援 …… (中央地域) 68

キャベツの安定生産支援 …… (八幡平) 70

県内一のアスパラガス産地を目指して …… (奥州) 72

ＪＡおおふなとピーマン生産部会における活動支援について …… (大船渡) 74

畑わさび産地維持に向けた取り組み ……（宮古） 76
りんどう技術アドバイザーを活用した高温対策技術の確立・導入 ……（中央地域） 78
りんどうの単収向上に向けた取り組み ……（奥州） 80
小ぎくの単収向上に向けた取り組み ……（一関） 82
ＯＨゆり産地の活性化支援 ……（盛岡） 84
りんご担い手の基本技術習得支援（りんごステップアップ講座の開催） ……（中央地域） 86
りんごフェザー苗木養成の取り組み ……（奥州） 88
「紅ロマン」の栽培法の確立 ……（奥州） 90
有望品種を核としたぶどう産地の形成 ……（中央県域） 92
新技術「日本なし樹体ジョイント栽培」の技術習得支援 ……（一関） 94
酪農経営における飼料代節約の取り組み ……（中央県域） 96
飼料用とうもろこしを活用した飼料費低減の取り組み ……（中央地域） 98
酪農サポートチームによる若手酪農家に対する生産技術向上支援 ……（奥州） 100
和牛繁殖農家の低コスト飼養管理（周年屋外飼養技術の検討） ……（中央県域） 102
次世代を担う若手肉用牛繁殖農家への支援 ……（一関） 104
宮古地域における黒毛和種繁殖経営の飼養管理改善に向けた取り組み ……（宮古） 106

３　「６次産業化等をめざした高付加価値化の推進」に対する支援 108
起業者への事業計画の作成・実践支援（６次産業化プランニング講座の開催） ……（中央県域） 108
起業経営体（重点支援対象）への支援について ……（中央地域） 110
地域特性を生かした６次産業化に向けて ……（八幡平） 112
農産加工起業者の育成・確保 ……（奥州） 114
農産加工組織の資質向上支援 ……（一関） 116
「北限のゆず」で新ブランドづくり ……（大船渡） 118
６次産業化に向けた支援 ……（二戸） 120

４　「環境と共生する産地づくりの推進」に対する支援 122
補給型施肥等による適正施肥の推進 ……（中央県域） 122

５　「農村・地域の振興」に対する支援 124
食の匠の組織活動の活性化と食文化伝承活動の強化に向けた取り組み ……（久慈） 124
観光農業の推進 ……（二戸） 126

６　「東日本大震災津波からの復旧・復興」に対する支援 128
牧草地除染の取り組み ……（中央県域） 128
牧草地除染の推進及び除染後のフォローアップ指導 ……（奥州） 130

Ⅲ　参考資料 132

１　平成 25 年度普及指導活動時間集計 …… 133
２　平成 25 年度普及関係職員名簿 …… 134
３　普及関係公所の所在地及び連絡先 …… 145

Ⅰ　気象経過と農作物の生育概況

１　平成 25 年１月から 12 月までの気象概況

２　農作物の生育概況

１　平成 25 年１月から 12 月までの気象概況

（１）年間の気象概況

【天候の特徴】
・１月、２月の低温、３月の暴風雪
・４月の低温、５月、６月晴れの日多く、降水量がかなり少ない
・７月、８月　大雨と局地的な豪雨
・９月、10 月台風、10 月の記録的な高温
・11 月の低温、12 月は雨多く高温傾向

平成 25 年は、日照時間が全般に多かったものの、１月から２月の気温が低く、内陸の山沿いでは曇りや雪の日が多かった。３月２日と 10 日は暴風雪となり、人的被害や住家被害、交通障害の発生などの大きな影響が出た。

４月は７日から８日にかけて暴風となり、交通機関に影響があった。強い寒気が南下し、５月の始めまで気温はかなり低かった。その後６月までは高気圧に覆われて晴れの日が多く、気温は高く、降水量はかなり少なかった。

７月は雨の日が続き、総降水量は平年の２倍を超える記録的な大雨となり、気温が低く経過した。８月は日最高気温が 35℃を上回る気温の高い日が続いた。９日は雫石、紫波で記録的な豪雨となった。

９月 16 日に台風 18 号が日本の南を北上した。10 月は 12 日と 13 日に低気圧や前線が通過し、16 日は台風 26 号が接近した。気温の高い日が多く、10 月としては記録的な高温となった。

11 月は冬型の気圧配置が継続することが多く、12 月 20 日は低気圧が三陸沖を発達しながら進んだため大雨となったところもあったが、12 月の平均気温は平年並から高かった。

（２）旬別の気象概況

＜１月＞：上旬から中旬の低温、多照

上旬：冬型の気圧配置となる日が多く、期間をとおして気温が低かった。内陸では山沿いを中心に雪の日が多く、沿岸部では晴れの日が多かった。２日は、前線や低気圧の影響で内陸の北部を中心に大雪となった。（旬平均気温：かなり低い、旬降水量；平年並～少ない、旬日照時間：多い）

中旬：低気圧や気圧の谷が短い周期で通過し、内陸では山沿いを中心に雪の日が多く、沿岸部は晴れの日が多かった。14日から15日にかけて、発達しながら本州の南を東進した低気圧の影響により沿岸部を中心に大雪となった。（旬平均気温：低い、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：多い～平年並）

下旬：高気圧と低気圧が交互に通過し、内陸では山沿いを中心に雪の日が多く、沿岸部では晴れの日が多かった。25日から26日にかけて、前線の影響により内陸を中心に大雪となった。（旬平均気温：平年並、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：多い）

＜２月＞：低温

上旬：低気圧や前線が次々と通過し、内陸では山沿いを中心に雪の日が多く、沿岸部では天気が短い周期で変わった。低気圧や冬型の気圧配置の影響で強風となる日があった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

中旬：低気圧や気圧の谷の影響を受けて曇りや雪の日が多かった。期間の終わりは冬型の気圧配置が強まり、内陸の山沿いを中心に大雪となるところがあった。（旬平均気温：低い、旬降水量：平年並、旬日照時間：少ない）

下旬：冬型の気圧配置の日が多く、気温が低く経過した。内陸の山沿いを中心に曇りや雪の日が多く、沿岸部では晴れの日が多かった。（旬平均気温：かなり低い、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

＜３月＞：降水量が少ない、２日と10日の暴風雪

上旬：低気圧や前線、気圧の谷が次々と通過した影響で、曇や雪または雨の日が多かった。２日と10日は、低気圧が日本海で急速に発達し、北日本を通過した影響で暴風雪となった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：平年並～少ない）

中旬：前線や気圧の谷と高気圧が交互に通過し、天気は周期的に変わった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

下旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、前線や気圧の谷の影響により、曇や雨または雪となる日もあった。（旬平均気温：平年並～低い、旬降水量：かなり少ない、旬日照時間：多い～平年並）

＜４月＞：７日～８日の暴風、中旬～下旬に内陸を中心に低温

上旬：低気圧と高気圧が交互に通過し、天気は周期的に変わった。７日から８日にかけて、発達した低気圧の影響により、暴風となった。（旬平均気温：高い、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：平年並～少ない）

中旬：前半は、高気圧に覆われて晴れの日が多かった。後半は、前線や気圧の谷の影響により、曇りや雨の日が多かった。（旬平均気温：平年並～低い、旬降水量：平年並、旬日照時間：多い～平年並）

下旬：高気圧に覆われて晴れの日もあったが、低気圧や前線の影響により曇りや雨の日が多かった。（旬平均気温：低い、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：平年並～少ない）

＜５月＞：少雨、上旬の顕著な低温、下旬の高温

上旬：中頃までは、低気圧や気圧の谷の影響により曇りや雨の日が多かったが、終わりは高気圧に覆われて晴れた。北から寒気が流れ込んだため、期間中の気温はかなり低く、８日には氷点下を観測したところが多かった。（旬平均気温：かなり低い、旬降水量：少ない、旬日照時間：平年並～少ない）

中旬：高気圧と低気圧が交互に通過し、天気は周期的に変わった。寒気や海風の影響を受けた沿岸部では、気温の低い日が続いた。（旬平均気温：平年並～低い、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

下旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かった。また、低気圧や前線によるまとまった雨がなかった。（旬平均気温：高い、旬降水量：は少ない、旬日照時間：多い～平年並）

＜６月＞：記録的な小雨、多照

上旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かった。７日と８日は、気圧の谷の影響で大気の状態が不安定となり、雷雨や局地的な強い雨が降ったものの、期間中の降水量は少なかった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：少ない、旬日照時間：かなり多い）

中旬：高気圧に覆われたものの、湿った風の影響で曇りの日が多かった。梅雨入りは15日と平年並であった。（旬平均気温：高い、旬降水量：平年並、旬日照時間：平年並～少ない）

下旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かった。低気圧や前線による雨がなく、降水量はかなり少なかった。（旬平均気温：平年並、旬降水量：かなり少ない、旬日照時間：多い）

＜７月＞：記録的な大雨と長雨、小照

上旬：前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多く、南から暖かく湿った空気が流れ込んだ影響で気温はかなり高かった。（旬平均気温：かなり高い、旬降水量：多い、旬日照時間：平年並～少ない）

中旬：前線や低気圧、オホーツク海高気圧の影響で曇りや雨の日が多かった。12日、15日、18日は日降水量が100㎜ を超えたところがあり、浸水害や土砂災害等が発生した。（旬平均気温：低い、旬降水量：かなり多い、旬日照時間：平年並～少ない）

下旬：前線や低気圧、気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多かった。26日から28日にかけて、上空に寒気を伴った低気圧が東北地方を通過した影響により、県南部を中心に150㎜ を超える大雨となった。この大雨により、浸水害や土砂災害、農地の冠水、農業施設に被害が発生した。（旬平均気温：低い、旬降水量：かなり多い、旬日照時間：かなり少ない）

＜８月＞：９日の集中豪雨、遅い梅雨明け、中旬の高温

上旬：天気は周期的に変わった。９日は東北地方に暖かく湿った空気が流れ込み、大気の状態が非常に不安定となり、盛岡・花北地域を中心に大雨となった。この大雨により、人的被害や浸水害、土砂災害、道路損壊、農業被害等が発生した。梅雨明けは８月10日と平年より13日遅かった。（旬平均気温：平年並、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：平年並）

中旬：前半は、高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、後半は前線の影響で曇りの日が多かった。暖かい空気に覆われて暑い日が多く、猛暑日となるところがあった。（旬平均気温：高い、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い）

下旬：天気は周期的に変わった。期間の終わりは、前線や低気圧の影響で、局地的に雷を伴って激しい雨の降ったところがあった。（旬平均気温：平年並～低い、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

＜９月＞：大雨、後半の高温と多照

上旬：低気圧や前線の影響で雨の日が多く、局地的に雷を伴って激しい雨の降る日もあった。期間の後半は、高気圧に覆われて晴れの日もあった。（旬平均気温：平年並、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：平年並～少ない）

中旬：前半は、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多かったが、後半は高気圧に覆われて晴れの日が続いた。16日は台風第18号の影響で大雨と強風となった。（旬平均気温：高い、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：多い）

下旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日もあった。（旬平均気温：高い、旬降水量：かなり少ない、旬日照時間：多い）

＜10 月＞：記録的高温、多雨と暴風、小照

上旬：低気圧や気圧の谷の影響で１日、２日、９日は雨となったが、その他の日は高気圧に大覆われて晴れや曇りとなった。（旬平均気温：かなり高い、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：かなり少ない）

中旬：天気は周期的に変化した。11日は低気圧や前線通過により大雨となったほか、12日から13日にかけては前線の通過により強風となった。また、16日は台風第26号が三陸沖を北東に進んだ影響により暴風雨となった。（旬平均気温：平年並、旬降水量：かなり多い、旬日照時間：多い～平年並）

下旬：気圧の谷の通過や冬型の気圧配置などの影響により、曇りや雨の日が多かった。（旬平均気温：かなり高い、旬降水量：かなり多い、旬日照時間：かなり少ない）

＜11 月＞：強風、沿岸部の小雨

上旬：天気は周期的に変わった。７日から８日にかけては、低気圧や前線の影響により県内各地で風が強まり、沿岸や北部で10m/s 以上を観測した所もあった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

中旬：始めは冬型の気圧配置が継続し気温が低く、中頃は高気圧に覆われ晴れ、終わりには低気圧の影響で雨の日が多かった。（旬平均気温：低い、旬降水量：少ない、旬日照時間：多い）

下旬：前線や気圧の谷が通過し、通過後は冬型の気圧配置となる日が多かった。このため、内陸や山沿いでは曇りや雨となったところが多く、沿岸では晴れのところが多かった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：多い～平年並、旬日照時間：平年並～少ない）

＜12 月＞：上旬の強風、20 日の大雨、中旬以降の冬型の気圧配置

上旬：高気圧や低気圧が交互に通過し、天気は周期的に変わった。７日は上空に強い寒気が流れ込んだため、内陸や山沿いでは気温が上がらず、今季初めての真冬日となった。また、10日は日本海を発達しながら北上した低気圧の影響により強風となった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：多い～平年並）

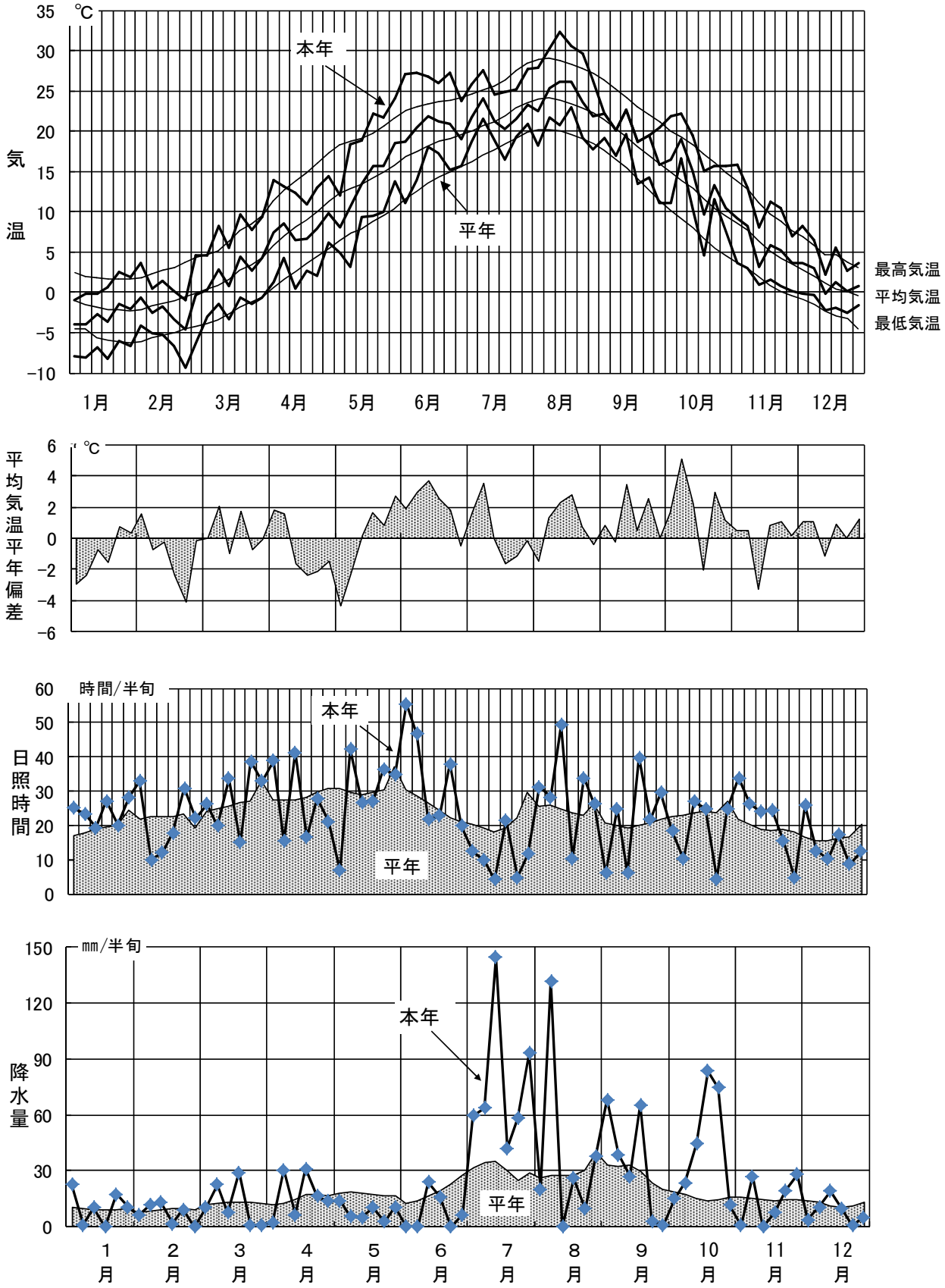
中旬：低気圧や前線の通過後に冬型の気圧配置となる日が多く、内陸では曇りや雪または雨となる日が多かった。沿岸では晴れる日が多かった。13日は前線を伴った低気圧が東北北部を通過した影響で、内陸中心に大雪となった。（旬平均気温：高い～平年並、旬降水量：多い、旬日照時間：平年並）

下旬：低気圧の通過後に冬型の気圧配置となる日が多く、曇りや雪の日が多かった。
（旬平均気温：平年並、旬降水量：平年並～少ない、旬日照時間：少ない）

（３）主な気象データ

ア　盛岡における気温、降水量、日照時間

２０１３年の気象経過（旬別：アメダス盛岡測候所）



イ　終霜

気象官署	月　日	平　年	昨　年
盛　岡	５月８日	５月３日	４月 22 日

ウ　梅雨入り・梅雨明け（東北北部）

	月　日	平　年	昨　年
梅雨入り	６月 15 日頃	６月 14 日頃	６月９日頃
梅雨明け	８月 10 日頃	７月 28 日頃	７月 26 日頃

エ　気象官署（盛岡、宮古、大船渡）における記録更新（第５位まで）

（ア）月平均気温

気象官署	月	記録(℃)	備　考
大船渡	5	12.3	低い方から４番目
大船渡	6	20.4	高い方から２番目
盛　岡	10	13.9	高い方から１番目
大船渡	10	15.5	高い方から３番目

（イ）月間降水量

気象官署	月	記録(mm)	備　考
宮　古	3	5.0	少ない方から２番目
大船渡	3	11.5	少ない方から１番目
大船渡	5	48.0	少ない方から１番目
大船渡	6	45.5	少ない方から１番目
盛　岡	7	461.0	多い方から１番目
宮　古	7	310.0	多い方から５番目
大船渡	7	412.0	多い方から２番目
盛　岡	10	252.5	多い方から１番目
宮　古	10	391.0	多い方から３番目
大船渡	10	260.5	多い方から５番目

（ウ）月間日照時間

気象官署	月	記録(cm)	備　考
盛　岡	7	64.2	少ない方から２番目
大船渡	7	67.7	少ない方から３番目
盛　岡	10	109.2	少ない方から４番目

（エ）降雪の深さの月合計

気象官署	月	記録(cm)	備　考
盛　岡	1	36	深い方から２番目
宮　古	3	67	深い方から５番目

２　農作物の生育概況

（１）水稲（作況指数「102」、１等米比率 95.6%）

水稲の移植後、良好な気象経過により初期生育は旺盛であったが、７月第３半旬以降、低温寡照となり生育が停滞した。梅雨明け後は高温多照で経過し、出穂期は平年より１日遅く、成熟期は平年より２日早かった。

初期生育は旺盛だったが、７月中旬以降の低温寡照経過や断続的な降雨により生育量に見合った追肥を実施できなかった圃場が多かったと推察され、有効茎歩合が低下し、総籾数は北部を除いて平年を下回った。

登熟期は全般に良好な気象経過であったが、一部地域で大雨等による冠水や土砂流入等の被害が発生し、倒伏程度の高い圃場も散見された。また、いもち病発生も近年で最も多かった。

作況指数は平年よりやや良の「102」となったが、粒厚分布及び千粒重が平年よりやや小さくなり、1.9㎜篩以下の割合が増加したことから作況指数ほどの実感が得られなかったとする生産者もみられた。

品質では、うるち米の１等米比率が95.6%(平成26年１月末日現在)と全国第２位（長野県に次いで）であった。主な落等理由は着色粒（斑点米カメムシ類）であった。

ア　育苗期（播種盛期は平年より１日遅い４月16日、苗質は良好）

県全体の播種作業は、平年に比べて１日遅かった。播種後、気温は育苗期間中を通じて平年を下回って経過した。苗質は、草丈が平年よりやや短かったが、充実度（風乾重／草丈）は平年を上回り、良好であった。

イ　移植期～活着期（移植盛期は平年より３日遅く５月19日、活着は概ね良好）

５月上旬は雲りや雨の日が多く、気温も平年を下回る日が多かったことから圃場準備が進まず、県全体の移植盛期は平年より３日遅かった。田植え後は好天に恵まれ活着は概ね良好であった。

なお、５月上旬に移植した一部の圃場では低温により活着・初期生育の遅れが見られた。また、用水を沢水やため池に依存している一部地域では、用水確保ができず移植を断念した圃場があったほか、代かき等の遅れから老化苗を移植した圃場で初期生育が遅れた事例が見られた。

ウ　分げつ期（高温多照により初期生育は良好）

６月に入ってからも高温多照・少雨で経過したことから分げつ発生は旺盛で、各農業改良普及センターが実施した一斉生育調査（６月14日及び６月25日の調査結果とも）では、各地域で草丈、茎数、葉数とも平年を上回った。

エ　本田生育期の土壌と稲体栄養（地上部乾物重やや少・窒素吸収量やや少）

６月25日調査以降､各地域とも概ね必要茎数は確保され､葉色が低下傾向であったこと、３～４月の降水量が少なかったものの根雪が遅くまであり、乾土効果による土壌中の窒素発現がそれほど期待できないと判断されたこと等から、「ひとめぼれ」､「あきたこまち」､「いわてっこ」は基準量Ｎ２kg/10aを上限に､「どんぴしゃり」は幼穂形成期にＮ２kg/10aの追肥を基本として追肥指導を行った。

なお、用水量が全般に不足している地域が多かったため、ひび割れを生じるほどの強い中干しは行わず、中干し終了後の用水確保に努めるよう指導した。

オ　幼穂形成期～出穂期（出穂盛期は平年より１日遅い８月８日）

７月第３半旬以降､低温寡照の気象経過となり､幼穂形成期は平年より３日早かったが、減数分裂期は平年並となった（幼穂形成期７月10日、減数分裂期７月27日)。

特に県北・沿岸地域は７月第３半旬以降20℃を下回る気象経過となり（宮古では７月15日以降、10日間連続でやませが吹走)、久慈地域・軽米地域では積算冷却度が20を超えるなど低温影響が懸念された。しかし、生育遅延により危険期が低温期とずれたことで、不稔歩合は平年を若干上回る程度であった。

７月第６半旬以降、高温多照の気象経過となり出穂期は平年より１日遅い８月８日で、開花も良好だった。

カ　登熟期～成熟期（登熟歩合はやや良）

登熟期は全般に高温多照で経過したものの、玄米品質の低下が懸念される高温とはならず、８月 30 日に各業改良普及センターが実施した登熟状況調査では、沈下籾数歩合が平年を上回り､登熟は良好であった｡また､危険期の低温影響を調査するため不稔調査を行った結果、不稔歩合は各地とも概ね平年並で、収量への影響はほとんどないものと推察された。

キ　刈り取り期（刈り取り盛期は平年より２日早い10月２日）

収穫作業は平年を上回る進度で進み、刈取盛期は平年より２日早い10月２日であった。

ク　収量（作況指数「102」）

全県で穂数は平年を下回り、一穂籾数は東部を除き平年並～やや多かった。総籾数は北部で平年を上回ったが、他地域では平年を５％程度下回った。登熟歩合は平年を上回ったものの、千粒重は平年よりやや小さかった。

作況指数は平年よりやや良の「102」となったが、粒厚分布は平年よりやや小さいほうにシフトしたことから、1.9mm以下となる割合がやや増加し、作況指数ほどの実感を伴わなかったとする生産者が多かった。

なお、穂数が少なかった要因としては、断続的な降雨により中干しが十分行えず、生育量に見合った追肥も行えなかった生産者が多く、この結果、有効茎歩合が低下したと推察された。

ケ　品質（１等米比率95.6%。落等原因１位は斑点米カメムシ）

平成26年１月末日現在、うるち米の１等米比率は95.6%と全国第２位（長野県に次ぐ）であった。２等以下に格付けされた主な理由は、「着色粒(カメムシ類)」が40.5%（総検査数量に占める割合1.8%)、「形質（その他)」が21.6%（同1.0%)、「充実度」が7.2%（同0.3%）であった。

品種別の１等米比率は、「ひとめぼれ」が95.7%、「どんぴしゃり」が96.1%、「あきたこまち」が96.0%、「いわてっこ」が95.7%であった。

コ　主要病害虫の発生（葉いもちやや多・穂いもち多､斑点米カメムシ類やや小（斑点米やや少））

いもち病は、７月の多雨により、全県的に感染好適条件が多く出現し、特に葉いもちの８月上旬における上位葉での発生がやや多くなった。８月以降も引続き降雨日数が多かったことに加え、穂いもち防除実施率が低かったことも一因となり、穂いもちが多発した。

斑点米カメムシ類は、期間を通じて平年並からやや少ない発生であったが、全県の平均割れ籾率は16.3%と平年（10.7%）に比べると高く、そのため斑点米被害は平年に比べるとやや多くなった。発生程度が中以上（落等相当）のほ場率は、県北・沿岸部が高く、県南部が低かった。

（２）畑作物（小麦、大豆）

ア　小麦

【25年産小麦：24年播種】

（ア）越冬前

10月に入って播種作業が本格化し、10月31日時点で97%が終了したが、県南部を中心に播種期が平年よりも遅れたところが多かった。

10月は気温の高い傾向が続き、適期に播種した地域では小麦の出芽が順調で越冬前の生育も平年より旺盛であったが、10月中旬以降の降雨の影響で播種が遅れた地域では生育量が少なく、越冬前の茎数も平年を下回った。

（イ）越冬後

根雪期間が平年よりやや長かったものの、越冬後の好天により起生期は平年並みで、湿害の発生も少なく、越冬後の生育も概ね順調に進んだ。

（ウ）生育期

４月20日現在の生育は、ゆきちからの生育量は平年をやや上回ったものの、ナンブコムギは萎縮病類の発生している圃場が平年並みに多くみられ、茎立ちが遅れ、茎数がやや少ないため、全県的にはほぼ平年並みの生育量と生育ステージとなった。

４月中旬以降は低温傾向が続き、５月上旬に入っても降霜の日があるなど低温傾向が続いた。このため小麦の生育は停滞し、５月上旬時点での生育ステージは平年よりも５日程度の遅れとなった。

（エ）出穂期～収穫期

５月中旬に入り平均気温は平年を上回り、ゆきちからを中心に生育がすすんだものの、生育ステージは依然として平年よりも５日程度の遅れで、花巻管内の出穂期はゆきちからで５月24日前後となった。また、出穂から開花期までの日数は平年よりも短いところが多く、開花期は全県で平年よりも４日程度の遅れとなった。

開花期以降、登熟は順調に進んだが、６月の高温・少雨の影響により成熟がやや早まった。収穫は６月末から紫波方面で始まり、順次収穫が進んだが、収穫開始は平年よりも３日程度の遅れとなった。７月３～６日、８日、10～15日にほぼ連続してまとまった降雨がみられ、まとまった日照時間があったのは唯一７月７日のみという状況であった。このため、収穫適期に達していてもコンバインが入れず、雨害により穂発芽の発生が品種によらず広域で多発する状況となり、規格外が３割程度発生し、外観品質が大きく低下した。穂発芽以外にも黒カビ粒や退色粒等の被害粒の発生も見られた。

成熟期の生育・収量については、ナンブコムギで縞萎縮病の発病程度が大きかった一部の地域を除くと、全般に穂数が多く、穂長が長い傾向がみられた。これは、４月の低温で窒素追肥の回数を増やした地域が多く、分げつ茎や幼穂の発育が促されたことが要因の一つと考えられた。県平均収量は対平年比102の176kg/10aであった。

（オ）病害の発生

病害の発生状況をみると、雪腐病は生育が旺盛な圃場で散見されるものの発生程度は低かった。萎縮病類は播種後の気温が高かったため連作ほ場を中心に発病がみられ、平年よりも発生量が多かった。例年萎縮病類の発生の見られる地域では発病程度が高く、株全体に黄化の見られる圃場もあった。赤さび病はナンブコムギを中心に散見されたが、発生圃場率は約26%と平年よりもやや低かった。うどんこ病はほとんど発生が見られず、発生圃場率は平年よりも低かった。赤かび病は発生圃場率が44%と平年並みであったが、ほとんどが発病穂率１%未満の圃場であり、発病程度は低かった。また、ゆきちからを中心に６月後半に症状が目立つ圃場も見られた。

表１　小麦の品種別検査成績（平成 25 年 12 月 31 日現在）

品種名	区分		25 年産	品種名	区分		25 年産
ナンブコムギ	検査数量（ｔ）		3,428	ゆきちから	検査数量（ｔ）		3,498
	等級比率（%）	１等	46.4		等級比率（%）	１等	75.1
		２等	15.7			２等	6.2
		規格外	37.9			規格外	18.6

【26年産小麦：25年播種】

（ア）播種期～越冬前

播種は９月末から始まったものの、10 月に入ってからの台風や断続的な降雨により播種作業が遅れ、播種終期は平年よりも１週間程度遅かった。出芽後の生育は概ね順調に進んだ。

イ　大豆

（ア）播種期～開花期

６月の高温・少雨の影響により、播種開始は平年よりもやや遅れたが、６月 20 日前後には終期となった。また、出芽に要する日数が平年よりも長くなったものの、出芽揃い・苗立ちは概ね良好であった。ただし、県北の一部地域では乾燥により、県南の一部地域では播種直後の降雨によるクラスト形成により、出芽不良となる圃場も見られた。

６月中旬と下旬に適度な降雨もあり、生育は順調に進んだ。一方、７月に入ってからは降雨の日が多く、日照時間が少なかった。このため、各地で滞水している圃場が見られ、７月後半には葉色の低下や茎疫病の発生が見られる圃場が散見された。

開花期は県平均で平年より３日程度早かった。８月１日現在の生育は７月の長雨の影響により全般に分枝数が少なく、県南部では主茎長が短い傾向であった（盛岡以北では並～長い）。

（イ）開花期～収穫期

７月下旬に県南部を中心とした大雨、８月上旬には県央部で集中豪雨があり、各地で浸冠水の被害が見られた。９月中旬には、一関地域で台風による圃場への浸水の被害が見られた。

開花期以降は、比較的気温の高い傾向が続き、日照時間も多かったが、９月中旬の台風の影響により倒伏した圃場が多く見られ、その後の断続的な降雨の影響もあり登熟がやや劣った。

成熟期は概ね平年並みであったが、10 月に入り降雨の日が多く、収穫は平年よりも７日程度遅れ、収穫が 12 月にずれ込む地域も見られた。

（ウ）病害虫の発生

播種後にネキリムシやタネバエの被害が一部地域で見られたものの、発生量は少なかった。７月にはツメクサガやオオタバコガなどの食葉性害虫の被害が各地でみられ、平年よりも発生量がやや多かった。紫斑病は、９月上旬に感染に好適な気象条件となったため、平年より発生量がやや多かった。また、登熟期に入って、褐紋病と思われる葉の褐変症状が各地で散見された。マメシンクイガ、カメムシは平年より発生量が多かった。

（エ）収量・品質

６月の乾燥と７月の長雨により、栄養成長が抑制され、さらに開花も早まったために全般に生育量が小さく、着莢数が少なかった。さらに登熟期後半の９月～10 月の断続的な降雨により登熟が抑制されて粒の肥大が悪くなり、百粒重が小さく、特にリュウホウを中心にしわ粒が多く発生した。また、降雨の影響による刈遅れから、腐敗粒や紫斑粒などの被害粒が多発した。平成 26 年２月 18 日現在の収量は、県全体で 84kg/10a で（農

林水産省発表)、平年(過去７カ年のうち最高値と最低値を除いた５カ年平均値)比 71%となっている。品質面では開花期以降の台風や断続的な降雨による登熟不良の影響で粒の充実が劣り、しわ粒の発生が多かったことから、１等比率が１月末現在で 7.0%と平年(36.6%)よりもかなり低くなっている。

(３)野菜

ア　きゅうり

露地普通作型では定植後１ヶ月間少雨乾燥傾向が続いたことにより、初期生育が緩慢で節間が短く推移したほか、側枝の発生や雌花の着生が例年に比べ少ない傾向であった。７月以降は曇天及び度重なる豪雨が９月まで続き、冠水、排水不良等による生育障害も各地で発生し、全般に昨年の収量を下回った。しかし、かん水施設を整備し、初期の乾燥時に適切な水管理を実施した圃場においては 10 月下旬まで収穫が継続された。

病害虫はキュウリホモプシス根腐病が例年より多発した。梅雨明け後は県内で広く炭そ病が発生したほか、褐斑病の発生も例年並みに見られた。害虫では６月下旬頃からきゅうりでは今まで問題とならなかったオオタバコガによる被害が県内で広く発生し、病害との誤認から防除が遅れ気味であった。

収量は前年比 80%、全体出荷量も 77%といずれも前年を大きく下回った。

イ　トマト

３～４月の低温の影響により、生育初期の生育が緩慢で、低段果房に低温障害果の発生が目立った。６月は一転して好天となったが、低温により根張りが不十分な圃場が多く、生育が弱い状態が続いた。７月は日照不足から全般に着色が遅れ気味となり、なかなか出荷量が伸びてこなかった。梅雨明け後も度重なる豪雨等の影響により草勢回復には時間を要し、８月上旬に出荷ピークを迎えたものの、以降は気温の低下により着色も進まず、９月いっぱいで終盤となる圃場が例年より多かった。

病害虫は、６月下旬から灰色かび病が発生したほか、豪雨の影響により疫病の発生も例年より多かった。土壌病害では、青枯病、かいよう病の発生が例年より多発傾向であった。害虫ではオオタバコガの被害が６月から確認されたほか、アザミウマ類の被害も多かった。

収量は前年比 92%、全体出荷量も 89%といずれも昨年を下回った。

ウ　ピーマン

３～４月の低温により、苗の生育・定植後の活着・初期生育が全般に停滞傾向であった。その後、６月の乾燥により尻腐れ果が多発したほか、露地作型では圃場の乾燥による活着・初期生育の不良も見られた。７月は一時期低温の影響で黒変果の発生も見られたが、日照不足の影響により花落ちが多く、着果のサイクルが大きく乱れた。梅雨明け以降９月までは雨よけ、露地作型ともに高温乾燥の影響による尻腐れ果や日焼け果の発生が多く見られた。特に露地では、９月以降過着果等による草勢の低下、果実肥大の遅れによる赤果が多発した。

病害虫は６月以降アブラムシの発生が増加し、それに伴うウイルス病(ＣＭＶ)の発生も見られた。タバコガは７月以降発生が確認されたが、昨年に比べると被害は少なかった。病害の発生は６月に斑点病の発生が散見され、７月以降は灰色かび病や疫病の発生が見られた。斑点病は発生が早かったところで多発傾向となり、梅雨明け以降は青枯病の発生が増加した。９月に入ると草勢の低下とともに斑点病・うどんこ病の多発圃場が見られた。

収量は前年比 90.3%、全体出荷量も前年比 86.9%と、いずれも昨年を下回った。

エ　ほうれんそう

昨年よりも雪解けが早く、作業は順調に進み、４、５月の天候も安定し、概ね順調に生育したことから、５月の出荷量は一昨年並みとなった。６月は乾燥が続いたことから、適切な土壌水分を維持できなかったところで出芽不良や生育不良が発生した。６月の乾燥による生育遅延と７月の曇雨天による寡日照が重なったことにより、抽だいが７月下旬頃まで各地で確認された。８月に梅雨明け（８月 10 日頃）となり生育は回復したが、高温による生育不良や萎れなどの障害が見られた。９月は概ね順調に生育したが、台風の影響により一部地域が被害を受け、過湿による生育不良となった。

病害虫は萎凋病が６月以降発生したが、土壌消毒を実施した圃場の多くでは発生が抑えられた。６月の高温乾燥の影響でアザミウマ類が発生し、被害株が例年より多く、７月まで発生した。ケナガコナダニ、シロオビノメイガ、アブラムシは例年並に発生した。ウリハムシモドキも一部で発生したものの、昨年より被害は少なく経過した。

生食用露地ほうれんそうの春どりは、収穫期近くの降雨も少なく、品質は良好であったが、一部の品種で抽だいが見られた。また、マツ花粉の付着による葉の汚れが一部であった。秋どりは、９月の台風による水分過多での生育不良や、収穫期近くの大雨による葉の裂けや葉縁の枯れが見られ、生食用として出荷困難な圃場もあった。

オ　ねぎ

定植は一部低温などにより遅れが見られたが、概ね順調に行われた。６月は乾燥により生育が停滞傾向となった。７、８月は降雨が続き乾燥が解消された一方、管理の遅れなどや排水不良により生育不良が見られた。さらに８月上旬に盛岡地域を中心とした豪雨による圃場の土壌流出などの影響で倒伏や生育不良が見られた。９月以降は気温が低下し、葉鞘茎の肥大が進んだ一方で、台風などの影響により作業の遅れや倒伏などが見られた。収穫開始は６月の生育停滞の影響により全体的に遅れ、例年より細い株が多かった。また、降雨による作業遅れにより軟白部のボケが見られた。

病害虫の発生は全体的に例年並かやや少ない発生だったが、大雨の影響により９月後半から 10 月にかけてべと病、さび病、黒斑病の発生が各地で確認された。

カ　キャベツ

雪解けは例年並みで、順調に定植が開始された。生育は５～６月にかけては少雨の影響で概ね１週間程度の生育遅れとなった。６月は乾燥により小玉傾向となった。その後は降雨により生育は概ね順調に推移したものの、株腐病が発生し、数量は例年よりも少なく経過した。９月以降は気温の低下に伴い生育が緩慢となり、小玉傾向となった。

病害虫は７月～８月にかけて株腐病が例年よりも多く発生した。

キ　レタス

雪解けは例年並みで、順調に定植が開始された。県央部の春レタスは低温により生育が停滞し、小玉傾向となった。県北部の定植は平年並に４月上旬から始まったが、その後低温と乾燥により収穫が 1 週間程度遅れ、本格的な出荷は６月中旬となった。６月は乾燥が続き、７月中旬以降は日照不足により生育は停滞し、出荷量も減少傾向となった。８月は高温により腐敗性病害が発生し、９月前半まで収穫に影響した。９月後半以降は腐敗性病害が減少し、出荷量も増加したが、10 月前半で収穫終了となった。

ク　だいこん

高冷地での播種作業は例年並の４月下旬から開始された。７月は長雨の影響で播種作業に遅れが見られた。５月下旬に低温があったため、収穫初期に一部で抽だいの発生が見られた。６月は乾燥で推移したことにより、出芽不良や株の枯死が見られた。７月以降の生育は比較的順調に推移した。８月は乾燥のため生育遅延が見られたが、例年よりもキスジノミハムシの被害が少なく、堅調な出荷量となった。９月は７月の播種遅れにより一時期出荷量が減少したが、その後は順調な出荷となった。

（４）花き

ア　りんどう

（ア）生育期

雪融けが遅れたことから萌芽・展葉期は平年より２～４日程度の遅れとなった。４月下旬から５月上旬にかけて低温で推移したこと、６月に降雨が少なく圃場乾燥したことから草丈が平年よりやや短い生育となった。５月下旬以降、気温が平年より高く経過したことから側芽発生期は平年より５日程度早くなった。

（イ）開花期

７月以降の日照不足や長雨の影響を受け、開花期は極早生種で平年より２日程度、早生種では５日程度遅くなった。前年に発生した花弁の着色不良などの高温障害は少なかった。晩生種は早生種同様、開花の遅れがみられた。一方、極晩生種は平年並みの開花となった。

（ウ）病害虫

主要病害である葉枯病や花腐菌核病は、平年より少ない発生となった。一方、７月以降、降雨が多く、県内各地で黒斑病の発生が多かった。また、長雨や大雨による圃場の浸水などの影響で茎枯病などによる立枯れや根腐れ症状の発生が多くみられた。害虫ではリンドウホソハマキの発生が平年よりやや多い傾向にあったが、薬剤防除により被害は少なく抑えられた。ハダニ類やアザミウマ類の発生は少なかった。

イ　小ぎく

（ア）育苗・定植期

８月咲品種の定植は、育苗期間中が低温で経過したため発根が遅れたこと、４月下旬から５月上旬の定植時期に天候不順となったことで、やや遅れがみられた。また、定植後の降霜や低温により初期生育は緩慢であった。一方、９月咲品種の定植は、５月中旬以降は天候に恵まれ、順調に進んだが、圃場の乾燥により初期生育の遅れがみられた。

（イ）生育期・開花期

８月咲品種は初期生育の遅れや６月に降雨が少なく圃場が乾燥したことにより草丈が短い生育となった。開花期は平年よりやや早くなったが、概ね８月上旬の盆需要期に出荷となった。

９月咲品種は定植後に圃場が乾燥し、初期生育の遅れがみられたが、その後の降雨で草丈は平年並みにまで回復した。開花期は前年のような開花遅延はみられず、平年並みの開花となった。

（ウ）病害虫

７月以降の長雨や大雨による影響で、県内各地で白さび病の発生が多く、出荷量が減少する要因となった。

害虫では一部地域でカメムシ類やアブラムシ類、キクスイカミキリの発生が多かったが、全般に少なく経過した。オオタバコガは６月下旬以降、県内各地で発生が確認され、

８月以降発生が増加したが、薬剤防除により被害は少なく抑えられた。また、ハダニ類、アザミウマ類の発生は少なかった。

（５）果樹

ア　りんご

（ア）花芽の状況

平成 25 年産りんごの花芽の状況は、花芽率を県平均で見ると「つがる」、「ジョナゴールド」、「ふじ」とも概ね平年並みとなった。一方、一部地域では 60％以下となっており、地域的なバラツキもみられた。また、弱小花芽率は、県平均で比較すると「ふじ」でやや高め、特に県中部で高い傾向にあり、「つがる」、「ジョナゴールド」は平年を下回った。

近年の生育期間中の猛暑による影響で、花芽率は 23 年産は平年より低く、24 年産は平年より高くと、隔年結果（25 年産は低くなること）が懸念されたが、花芽形成期（７月）の最高気温（平年差+2.3℃）と比較して最低気温（平年差+1.1℃）が低く推移したため、25 年産は平年並みに落ち着いた。一方、花芽が多く、結実も良かったことから摘果作業が遅れたこと、８月以降は記録的な高温干ばつだったこと、10 月以降も気温が高めに推移したため、果実のデンプンや地色の抜けが悪く、収穫作業が遅れたことなどにより、弱小花芽が高めになったと推察される。

（イ）発芽～展葉期

４月上旬までの気温が高めに推移したため、発芽は概ね平年並み、昨年と比較すると６日前後早くなった。

４月中旬以降の気温は平年より低くなり、展葉は低温の影響が少なかった県南部で概ね平年並み、それ以外の地域は平年より３～４日の遅れとなった。

（ウ）開花期及び結実の状況

４月からの低温が５月半ばまで続いたため、開花、満開はふじで平年より７日程度遅れ、つがるやジョナゴールドでも５～６日の遅れとなった。

開花期間中の気温は平年より高く、天候も良好であったため、ふじの結実率は概ね平年並からやや高めとなった。ふじ以外の品種では、つがる、ジョナゴールドとも中心果の結実率はやや高めとなった。

５月８日の低温（降霜等）によりめしべの褐変等が認められたが、収量への大きな影響は認められなかった。一方、県南部や沿岸部等でサビ果が見られており、開花前の低温の影響と推察された。

（エ）果実肥大

開花が遅れたことにより、６月１日時点の果実肥大はいずれの品種も県平均で平年比の 60％程度であった。６月は干魃、７月は長雨、日照不足、８月の高温、集中豪雨など厳しい気象条件であったが、果実肥大は回復傾向となった。しかしながら、平年値にはわずかに届かず、全体的に小玉傾向となった。

（オ）収穫期及び果実品質

「つがる」の果実品質は、硬度、デンプン反応が平年並み～やや高め、糖度は平年並みとなった。しかし、地域的なバラツキがあり、県南部では硬度の低下が見られた。８月下旬に気温の低い時期があったため早生品種の着色は良好であったが、デンプンや地色の抜けが悪い傾向がみられた。収穫期は概ね９月中旬頃となった。

「ジョナゴールド」の果実品質は、硬度、デンプン反応指数が平年より高め、糖度は平年より低くなった。９月以降気温が高く推移し、また、降雨も多かったため、デンプン、地色の抜けが悪い傾向がみられた。一方、全体的に気温は高めであったが、９月中旬の一時期に気温の低下が見られたため、「つがる」同様、着色は良好であった。収穫期

は 10 月中旬頃となった。

「ふじ」の果実品質は、硬度、デンプン反応指数が平年よりやや高め、糖度は平年より低くなった。また、蜜入りは平年よりやや低いものの、ここ数年では多い傾向であった。　早生、中生品種同様、着色は良好であったが、デンプン、地色の抜けが悪い傾向がみられた。

（カ）気象災害

７月から８月にかけての集中豪雨や９月 16 日の台風 18 号により、園地への浸水や土砂の流入、それに伴う倒木等がみられた。

収穫期の強風害では、９月 16 日の台風 18 号、10 月 16 日の台風 26 号、11 月 7 日の低気圧により落果や倒木の被害が認められた。

（キ）病害虫

７月以降、降雨日が多く、病害の多発が心配されたが、斑点落葉病、果実病害である輪紋病、炭そ病、すす病などいずれの病害も平年並みに抑えられた。害虫の発生も全般的に少なく推移した。なお、ナミハダニは８月までの発生は少なかったものの、９月以降増加する園地も認められた。昨年多発したカメムシは少なく推移した。

（ク）作柄評価

生産量は、全農岩手県本部の取扱実績（平成 26 年 1 月末時点）から、数量で前年対比 85％となった。これは、開花の遅れや厳しい気象条件による小玉化、収穫期前の台風等による落下が原因と考えられた。

販売単価については、前年比 107％となった。これは、気象災害（長野県の霜害、青森県の開花遅れによる小玉化）により、全国的に生産量が少なくなったことにより、引き合いが強くなったためと考えられた。

イ　ぶどう（キャンベルアーリー）

（ア）発芽期～展葉期

５月上旬まで気温が低く推移したため、発芽及び展葉は平年より５～８日程度遅れた。

（イ）開花期～結実期

５月中旬以降は気温が高めに推移したため、定点観測地点の満開期は平年より早くなった。一方、天候の回復で新梢伸長が旺盛になったこと、６月まで旱魃が続いたこと等により若干の花ぶるいが見られ、結実率は平年を下回った。

（ウ）新梢伸長期

発芽、展葉の遅れで新梢長は平年の 63％でのスタートとなった。５月中旬以降は気温が高く推移したため、急速に平年並みまで回復した。しかし、６月の乾燥や７月の日照不足や長雨などの影響により、最終的な新梢長は平年の 80％となった。

厳しい気象条件ながら房長は平年並み、一方、果粒肥大は７月以降、降水量が多かったため、生育期間を通して平年値を上回った。

（エ）収穫期

キャンベルアーリーの着色はやや早め､紅伊豆､サニールージュ等の着色はやや遅く、品種によるばらつきが見られた。

７月は日照不足となったが、生育期間を通して概ね気温が高めで推移したため、糖度は８月までは平年より高めとなった。しかし、収穫期前（９月）に降水量が多かったため９月以降はやや低下した。

収穫期前の降雨により、紅伊豆等大粒種を中心に裂果の被害が見られた。

（オ）落葉期

10 月以降も気温が高めで経過したたものの、落葉は平年並だった。

新梢の登熟程度は、概ね平年並みだった。

（カ）病害虫

６月までは降水量が少なかったため、灰色かび病の発生は少なかった。一方、７月以降は降水量が多くなり、べと病の発生が目立った。また、醸造用品種を中心にさび病の発生も見られた。害虫の発生は全般的に少なかった。

（キ）作柄評価

生産量は、系統取り扱いの出荷販売実績から、前年比 93%の数量となった。これは、収穫期直前の降雨による裂果が原因と考えられた。

販売単価については前年比 96%であり、概ね平年並みが維持された。

（６）飼料作物

ア　牧草

（ア）１番草

５月上中旬の気温が低く、５月を通じて降水量が少なかったことから、１番草の生育はやや遅めに推移し、収量もやや不良であった。

（イ）２番草

６月末、降水量が少ないことにより一部で生育不良が見られた。収穫まで生育不良が続いた地域と７月の降水量が多くなり、生育状況は平年並みに戻った地域もあり、収量は平年並みからやや不良となった。収穫期（７月）の多雨により、収穫作業が遅れた。

（ウ）３番草

８月に、降水量が少ない地域で生育がやや遅れ気味となったが、その他地域では概ね平年並みに推移。草丈が十分に確保できず収量は平年より少なかった。

イ　とうもろこし

（ア）播種期～出穂期

播種作業は、一部消雪の遅れから１週間ほど遅れる地域もあったが、概ね平年と同等であった。播種時期に降水量が少なく、出芽の遅れや不揃いが目立つ地域も見られた。少雨等により一部発育不良が見られるものの、概ね平年並みの生育であった。

（イ）収穫期

黄熟期到達は平年並からやや早く推移したものの、播種時期の少雨による出芽の遅れがその後の生育に影響した地域もあり、作況はやや不良～平年並みで推移。

（ウ）局地的に生じた障害等

台風 18 号の影響により、奥州地域で一部収穫を断念するほどの倒伏が見られた。

Ⅱ　普及指導活動の成果

１　「意欲と能力をもった経営体の育成」に対する支援

２　「消費地から信頼される産地の形成」に対する支援

３　「６次産業化等をめざした高付加価値化の推進」に対する支援

４　「環境と共生する産地づくりの推進」に対する支援

５　「農村・地域の振興」に対する支援

６　「東日本大震災津波からの復旧・復興」に対する支援

新規就農者の確保育成に向けた支援の取り組み

【盛岡農業改良普及センター】

■　課題名

新規就農者の確保育成

■　ねらい

盛岡地域の就農年齢の高齢化に伴い、農業の維持発展のため新規就農者を確保する。また、就農後の安定就農の実現に向けて栽培技術面、経営面において総合的な支援を図る。

■　活動対象

就農候補者、新規就農者、農業大学校生

■　活動経過

（１）就農候補者ならびに新規就農者の把握

ア　就農候補者、新規就農者の情報収集、共有

盛岡地方農業農村振興協議会担い手育成・普及部会で新規就農者実態調査に取り組み、就農候補者、新規就農者に関する情報の収集・共有を行った。

イ　農業大学校、盛岡農業高校との連携

農大生と地域農業関係者との懇談会、盛岡農業高校との連携会議を開催し、就農候補者への情報提供や就農意向の把握を行った。

ウ　就農相談対応

普及センターでの就農相談対応に加えて紫波町農林公社主催就農相談会、雫石町新規就農支援チームと連携した就農相談活動を行った。

（２）営農計画の策定・達成支援

ア　営農計画の策定支援

認定就農者、青年就農給付金、岩手県農業公社担い手育成基金事業の申請者を主な対象として営農計画の作成支援を行った。

イ　営農計画の達成支援

認定就農者の就農施設等資金借受者を対象に営農計画達成に向けた支援を行った。所内向けの新規就農者リストを作成し情報共有を図るとともに、支援対象の重点化を行った。重点対象者には、新規就農担当と技術担当が一緒に入り指導を行った。

（３）新規就農者等への個別支援・認定農業者への誘導

ア　新規就農者等への個別支援

月１回の定期巡回や新規就農者等プロジェクト研究事業（農振協事業）等を活用し、新規就農者の課題把握や課題解決に向けた支援を行った。また、新規就農者等フォローアップ研修会を開催し、新規就農者の関心のある最新技術や中小企業診断士を講師とした研修を実施した。

イ　認定農業者への誘導

就農５年目の新規就農者を中央農業改良普及センター主催「青年農業者企業家塾」へ参加誘導し、経営発展に向けた事業計画書の作成支援を行った。

■　活動成果

（１）就農候補者ならびに新規就農者の把握

ア　就農候補者、新規就農者の情報収集、共有

新規就農者確保目標26名に対して、平成23年度26名、平成24年度37名、平成25年度38名と目標を上回る新規就農者を確保した。

イ　農業大学校、盛岡農業高校との連携

新規就農者プロジェクト研究事業を活用し、農大時代に取り組んできた研究内容を親元就農した農大卒業者に引き続き取り組ませるなど切れ目のない支援に取り組んだ。

ウ　就農相談対応

普及センターで平成24年度43名、平成25年度25名、紫波町農林公社主催就農相談会で平成24年度４名、平成25年度１名から就農相談を受けた。また、雫石町新規就農支援チームでは、各機関が受けた就農相談等の内容について情報共有した。

（２）営農計画の策定・達成支援

ア　営農計画の策定支援

平成23年度７名、平成24年度11名、平成25年度９名に対して就農計画等の作成支援を行った。そのうち平成23年度３名、平成24年度５名、平成25年度１名が認定就農者となった。営農計画の作成を通じて、農業経営像が具体化されていくとともに収益力向上やコスト低減の必要性を認識した。

イ　営農計画の達成支援

平成24年度９名、平成25年度13名を対象に営農計画達成に向け課題把握や解決支援に取り組んだ。特にも早急な経営改善が必要な新規就農者３名を重点支援対象者に位置付け、改善計画書の作成支援を行うとともに、市町村・ＪＡ・振興局農政部・普及セによる担当者会議を開催して情報共有を図り今後の対応について協議し、改善計画の実行について関係機関で支援していくこととなった。

（３）新規就農者等への個別支援・認定農業者への誘導

ア　新規就農者等への個別支援

新規就農者フォローアップ研修会を通じて新規就農者の規模拡大意欲が向上してきた。規模拡大に関心のある新規就農者には、規模拡大に向けた事業計画の作成支援を行った。

イ　認定農業者への誘導

H26年3月に認定農業者となり、「青年農業者企業家塾」で作成した事業計画書をベースに規模拡大に向けた事業・資金の導入の具体的な検討を行っている。

就農前に会社勤めをしながら自分が経営者として向いている職業は何かを考えている中で、農作業から経営管理まで自ら全てやらなければならない農業が合っていると思い就農を決意しました。

自分の子供に農業を継ぎたいと自然に言ってもらえるような農業経営をすること、トマトの産地づくりで自分の生まれ育った玉山区の地域活性化に貢献することが目標です。

所属職名：盛岡市玉山区　新規就農者（平成25年度）　氏名：玉山龍輔

■　協働した機関

市町村、ＪＡ、岩手県立農業大学校、岩手県立盛岡農業高校

■　盛岡農業改良普及センター

経営体育成チーム（チームリーダー：金森靖、チーム員：佐々木久彦、佐藤真澄、木村陽子、及川奈実絵、佐々木珠利）

執筆者：佐々木久彦

関係機関との連携による新規就農者支援

【奥州農業改良普及センター】

■　課題名

新規就農者の確保・育成

■　ねらい

新胆江地方新規就農者育成プランでは、新規就農者確保目標を 26 名としている。近年では非農家出身の就農希望者も増えていることから、関係機関との情報共有を通して地域に溶け込めるよう支援を展開した。

■　活動対象

新規就農候補者、新規就農者

■　活動経過

（１）関係機関との連携による新規就農者の確保・育成

ア　関係機関との情報共有

胆江地方農業振興協議会地域振興部会担い手育成支援班（以下、担い手支援班）では、研修段階から新規就農者をリスト化し、情報共有を図り、関係機関での支援を実施した。

イ　胆江地方就農相談会の開催

円滑な就農支援を目的に開催した。受入経営体に登録している経営体も参加し、就農希望者12名に就農相談を実施した。

（２）新規就農者の定着支援

ア　平成25年度新規就農者定着状況調査

平成20～24年度に新規就農した者を対象に、担い手支援班として調査班を編成し、個別巡回を行った。

イ　認定就農者支援

認定就農者を対象に、技術チーム・胆振協担い手班との連携により、個別支援（５名）を行った。ニーズに応じて各種研修会（いわて青年農業者企業家塾など）への参加誘導を行った。

ウ　経営管理研修会の開催

新規就農者や研修生を対象に複式簿記や営農計画の作成について指導した。

エ　受入態勢の整備

地域や推進品目を網羅するよう受入経営体の登録を推進した。

■　活動成果

（１）関係機関との連携による新規就農者の確保・育成

ア　関係機関での情報共有

就農相談や新規就農者情報、ＪＡの助成制度の動きなどを毎月の会議で情報共有できたことで、関係機関が連携をとって対応でき、新規就農者の確保や支援につながった。

今後は、胆江地方農業振興協議会園芸部会と連携した支援体制を構築し、園芸分野のニューファーマー確保に取り組んでいく。

イ　胆江地方就農相談会

就農に向けて個別相談対応に加え、研修受入経営体と元研修生の事例発表も行ったことで、就農に向けてのイメージ作りにつながった。

（２）新規就農者の定着支援

ア　平成 25 年度新規就農者定着状況調査

新規就農者定着率（過去５年間通算定着率）は 84.9%（就農者 109 名中 90 名定着）となった。

イ　認定就農者支援

非農家出身の新規就農者を重点的に支援した結果、１名は就農初年度ながら地域平均を上回る単収を達成することができた。また、次年度の計画作成も支援し、認定就農者が計画を意識しながら目標達成ができるよう支援を続けていく。

ウ　経営管理研修会の開催

14名が参加、参加者は簿記の知識習得に加え、参加者同士の交流も深めた。

エ　受入態勢の整備

受入経営体の登録推進により今年度は新たに３経営体が登録した。今後は農業農村指導士へも登録推進を図り、研修生の受入態勢を整備するとともに、地域や推進品目を網羅できるよう登録推進を図っていく。

（４）新規就農者数

平成 25 年３月 17 日現在 27 名(目標 26 名、達成率 103.8%)となっている。

新規就農ということで右も左も分からない中、二人三脚で、就農計画の作成、簿記研修など、普及センターの皆様には様々なサポートを頂きました。また、収穫作業を実際に手伝って頂いたこともありました。

己の至らなさ故、ご迷惑をおかけしたこともあったかと思いますが、普及センターの皆様の存在がとても心強く、励みになりました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。

就農から経営へと次のステージへ進み、抱える課題が変わってきました。次の目標へ向け、今後とも引き続きご支援頂ければ幸いです。

所属職名：新規就農者　　氏名：齋藤博幸

■　**協働した機関**

胆江地方農業振興協議会地域振興部会担い手育成支援班

（奥州市、奥州市農業委員会、金ケ崎町、金ケ崎町農業委員会、岩手ふるさと農業協同組合、岩手江刺農業協同組合、県南広域振興局農政部・農村整備室、奥州農業改良普及センターで構成）

■　**奥州農業改良普及センター**

担い手・農村活性化チーム（チームリーダー：八重樫耕一、
チーム員：多田浩美、澁谷まどか、秦広和）

執筆者：秦広和

一関地方新規就農者トータルサポートシステムの実施

【一関農業改良普及センター】

■　課題名

地域農業を担う意欲と能力のある担い手の育成

■　ねらい

一関地方農林振興協議会において、新規就農希望者の公募から、研修希望者と新規就農者受入経営体とのマッチング、各種事業を活用した研修の実施まで、関係機関が連携した体系的な研修支援を行う「一関地方新規就農者トータルサポートシステム」を実施し、一関地方における新たな農業の担い手の確保・育成を図る。

■　活動対象

新規就農希望者、新規就農者受入経営体

■　活動経過

（１）新規就農希望者の公募

一関地方で新規就農を目指して農業技術等の研修を希望する者を、管内市町及びＪＡのホームページ及び広報等で公募を行った。

（２）現地見学会の開催

公募により募集した研修希望者を対象として、平成25年８月に現地見学会を開催し、研修希望作目や先進的な農業経営の取り組みを見学してもらうことにより、新規就農希望者の目指す農業経営のイメージの確立を図った。

また、研修希望者が就農に至るまでの過程において不安に思っていることや疑問点などを解決し、円滑な就農が図られるよう、研修希望者と関係者で面談・助言を行った。

（３）新規就農受入経営体の斡旋と研修の実施

研修希望者２名に対して、研修実施において活用する支援策の助言や受入経営体とのマッチングを行い、トータルサポートシステムの研修生とし、新規就農受入経営体での実践研修を実施した。

（４）冬期座学研修の開催

平成26年１月から３月まで全９回にわたり、土づくりや農薬適正使用、農業簿記など栽培技術及び経営に関する基礎的な知識の習得を目的として、冬期座学研修を開催した。

（５）新規就農者受入経営体等との意見交換の実施

平成26年２月に一関地方農業後継者育成研修会を開催し、今後の担い手の確保・育成に関する取り組みの改善に資するため、新規就農者受入経営体及び農業農村指導士等と意見交換を行った。

■　活動成果

（１）新規就農者の確保

一関地方で新規就農を希望する者を公募した結果、２名がトータルサポートシステム研修生として研修を開始した。うち１名は40代の農家出身者で、一関地方で他産業に従事していたが、本システムで研修を行い、平成26年度から新たに農業経営を開始することとなった。

また、１名については、小ぎくを中心とした花き栽培での新規就農を目指し、引き続き研修を実施していくこととしている。

（２）関係機関が連携した新規就農支援体制の確立

一関地方農林業振興協議会担い手部会において、昨年度より検討を進めてきた「一関地方新規就農者トータルサポートシステム」の運用が開始され、関係機関が連携した体系的な就農支援体制を構築することができた。

また、岩手県農業農村指導士など新規就農受入経営体を拡充することにより、新規就農希望者の実践研修への協力体制を確立することができた。

（３）今後の課題

「一関地方新規就農者トータルサポートシステム」の一層の周知を図り、研修希望者の応募数を拡大するため、市町ホームページや広報による広報に加え、新聞広告など幅広い手段で、研修希望者の公募を行う。

また、新規就農者受入経営体の意見を踏まえ、研修作目に「果樹」を新たに加えて、経営の継承が危惧される果樹経営と新規就農希望者をマッチングし、樹園地等産地の生産基盤の減少に歯止めをかける仕組みづくりについて、関係機関と検討を進める。

受入経営体での見地見学会（H25．８）

冬期座学研修（H26．１～３）

今回、トータルサポートシステムで研修を受けさせていただき、土づくりからトマトの栽培管理、農業簿記など貴重な経験をさせていただきました。

今後とも普及センター、ＪＡからの指導を受けながら、皆さんから立派なトマト生産者として認められるように頑張りたい。

所属職名：一関市室根町　トータルサポートシステム研修生　氏名：遠藤比呂志

■　**協働した機関**

一関地方農林業振興協議会、岩手県農業農村指導士、新規就農者受入経営体

■　**一関農業改良普及センター**

担い手育成チーム（チームリーダー：根子善照、チーム員：千葉守、氏橋明子）

執筆者：千葉守

新規就農者の確保・育成に向けた取り組み

【二戸農業改良普及センター】

■　課題名

新規就農者の確保・育成

■　ねらい

当地域では、ここ数年目標としている新規就農者年間20名を確保することができている。

その一方で、Ｕターン後継者や新規参入者が就農前に十分な研修や知識習得の機会を得ずに営農を開始したり、家業を手伝うケースが増加しており、新規就農者の定着率も低くなっている（新規学卒、Ｕターン、新規参入：85.4％、農業雇用：65.5％（以上：平成25年度新規就農定着状況調査））ことから、知識・技術習得の場の提供、仲間づくり等の支援が就農定着率改善のポイントとなってくる。

そこで、就農後のフォローも含めた就農定着に向けての支援を行っていく。

■　活動対象

新規就農者、就農候補者

■　活動経過

（１）新規就農者を対象とした講座の開催

ア　就農から概ね５年以内の新規就農者を対象に、農業経営に関わる知識・情報及び技術に係る講座を開設し、就農定着が円滑に進むよう支援をした。

イ　平成23年から２ヵ年は「農業入門塾」という名称で開催した。入門塾は、土づくり、病害虫防除、マーケティング、農業簿記等の基本的な内容を新規就農者の皆に、幅広く理解してもらうため、23、24年と対象者を変え、年７回コースで開催した。

ウ　平成25年は、過去２年間の「農業入門塾」受講者並びにその他の新規就農者に対し、更なるレベルアップを図ることを目的に「新規就農者レベルアップ塾」という名称で開催した。レベルアップ塾は、農業生産管理工程（ＧＡＰ）、管内の園芸品目の新技術、経営戦略策定研修等の新たな内容も組み入れて、年６回コースで開催した。

（２）研修受入経営体（一戸夢ファーム、ナインズファーム）の活動支援

就農候補者を受け入れ、就農に向けた支援等を行う２つの研修受入経営体に対し、以下のような取組に関する支援を行った。

ア　一戸夢ファーム

（ア）研修生を対象とした講座の開催

・冬期間、研修生の資質向上を目的に、技術や経営、加工等に関する講座を開催し、普及センターでは、講座の講師として対応した。

・普及センターで対応した研修内容は、研修施設の主要品目であるトマトやねぎの栽培技術面を中心とした基礎知識、複式簿記に係る基本事項や農業経営に係る基本用語の意味などの経営面の基礎知識などである。

（イ）実証圃を活用しての栽培指導

・一戸夢ファームでは、研修生の技術習得・資質向上、優良品種の選定等を目的に実証圃を設置した。普及センターでは、研修生に対し、実証圃の管理をしながら、栽培管理に関する直接指導を行った他、実証圃のデータ収集とその分析を指導し、今後の管

理に向けた検討の助言を行った。

・さらに、一戸夢ファームの実証圃の結果を農協生産部会とも共有する場を設定し、両者が情報共有しながら今後の取り組み計画をたてるように支援した。

イ　ナインズファーム

（ア）研修施設の卒業生が所有する圃場の巡回

・ナインズファームの研修修了者13名と現在の研修生２名による研修修了生の圃場巡回研修で、圃場での栽培管理への助言や病害虫防除等の指導を行った。

■　活動成果

（１）新規就農者を対象とした講座の開催

ア　新規就農者を対象とした講座を受講した塾生の中から、二戸地域で開催している農業簿記講座やアグリフロンティアスクール（岩手県主催）等への参加希望が出てくるなど、塾生の経営改善、意識の高まりが見られてきている。

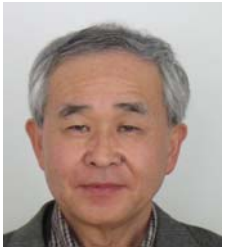
イ　講座を受講した塾生から、「塾生間で交流（横のつながり）を持ちたい。自分の経営拡大に向けて、他の塾生の取組状況を参考にしたい。」との希望が出てくるなど、仲間づくりに向けた意識や前向きな姿勢が出てきた。

（２）研修受入経営体（一戸夢ファーム、ナインズファーム）の活動支援

ア　栽培技術に関する指導、圃場巡回等により、研修生の疑問点や課題などが明らかになったことで、栽培に関する技術や知識を得ようとする姿勢が、一層見られるようになった。

イ　研修生から、農業簿記講座への参加希望が出てくるなど、経営面に関する意識の高まりが見られるようになった。

ウ　冬期講座の開催により、普及センターの他、地域の関係機関でも、研修生を育成しようとの意識が芽生えるなど、研修生の育成に向け、地域一体となった機運が見られるようになった。



一戸夢ファームは、研修生が農業の基礎を学びながら、幅広い知識を有した経営者を育てることを目的に、平成２５年に設置した研修施設です。

研修期間は２年であり、今年は土壌や防除、栽培、経営の基礎等について学びました。来年は、研修生自らが考えて栽培実践する能力を身に着けさせていきます。今後も普及と連携して、育成支援に取り組んでいきます。

所属職名：一戸夢ファーム　一戸町農業担い手育成指導部長　　氏名：高橋　寿一

■　協働した機関

二戸市、軽米町、九戸村、一戸町、各市町村農業委員会、新岩手農業協同組合、県北広域振興局二戸農林振興センター

■　二戸農業改良普及センター

担い手・農村起業育成チーム（チームリーダー：高橋寿夫、チーム員：佐々木利枝、藤原千穂）

執筆者：高橋寿夫

気仙地方農村青年クラブ連絡協議会の活動

【大船渡農業改良普及センター】

■　課題名

新規就農者の育成

■　ねらい

経営の拡大や、地域農業の担い手としての役割を担えるよう支援が必要である。管内青年組織の自主的な活動への誘導を行う。

■　活動対象

気仙地方農村青年クラブ連絡協議会

■　活動経過

（１）平成23年度

東日本大震災によりクラブ員が被災、活動が停滞し、一時は４Ｈクラブの存続が危ぶまれるほどであった。被災を免れた住田町のクラブ員を中心に、４Ｈクラブを盛り上げていこうという動きが見られ、積極性が見え始めた。一方で、４Ｈクラブの活動をどのように自身の経営に結び付けていくかが課題となった。

（２）平成24年度

新たな取り組みとして、圃場巡視会を開催した。また、住田町で開催された県連クラブ大会を成功させることができ、自信につながった。消費者交流は、岩手県農業研究センターの参観デーに参加した。

（３）平成25年度

ア　圃場巡視会

５回実施した。気仙４Ｈクラブにおける圃場巡視会は、１日に複数の圃場を巡る形ではなく、回ごとに場所を決めて、作業の実践を行うなどして相互の理解を深め、交流することを目的としている。クラブ員の認識では、圃場巡視会は「助け合い」の意味合いが強いとみられる。時間を作って積極的に参加する姿勢が見られた。

イ　岩泉町畑わさび視察

畑わさびの圃場から加工施設までの一連の流れを視察した。岩泉視察の話は前年度から話があったものの、クラブ員の“ドタキャン”が相次ぎ、延期となっていた。クラブ員には、目的を明確に持って視察に行くよう指導した。

ウ　消費者交流

震災後初めて産業まつりに参加した。住田町及び陸前高田市の２市町の産業まつり（延べ３日間）に参加し、野菜や花等の生産物を販売した。このほか、一部のクラブ員には、盛岡地方連の「若ぞう市」に個別参加し野菜販売を行うなどの動きも見られた。

エ　二戸地方連交流会

冬場はほうれんそう栽培を行っている浄法寺４Ｈクラブ会長の圃場視察、加工施設のおりつめ工房の視察、二戸４Ｈクラブや気仙４Ｈクラブ会長とつながりのある店での交流会を行った。交流会の後に、二戸４Ｈクラブのメンバーが視察で住田町を訪ねてくるなど、交流が深まった。

オ　アグリネットワーク2014青年の集い

菅野聡氏が、新規就農に係る自身の体験や夢について講演した。その場のなりゆきで発表することになったものの、本人もよく練習し、またクラブ員も講演を聞くためにアグリ

ネットワークに参加し、道中の車内で本人に練習させるなど、連帯感が感じられた。

カ　胆江地方農村担い手スキルアップ研修対応

胆江地方４Ｈクラブが気仙地方に視察に来るため、気仙４Ｈクラブも参加し、㈱グランパファームのレタス栽培や、南部園芸研究室の視察、交流会を実施した。都合が合わず、一部参加のクラブ員が多かったが、積極的に参加する姿勢が見られた。

■　活動成果

（１）活動の活発化

圃場巡視会は、昨年度１回が５回、消費者交流は昨年度１回が２回にそれぞれ増加、その他、他地方連との交流が行われるなど、昨年度に比較して活動回数が増加し、なおかつ、クラブ員の過半数が活動に参加することが多いなど、活動が活発化した。

理由は様々考えられるが、震災後の状況が落着きつつあることや、新規就農者が加入し、活動を盛り上げた面が大きいと感じる。

（２）残された課題

自主的な運営や活動が行われる仕組み作りが課題である。次年度は、会計業務をクラブ員が行うこととした。また、連絡網を作成することとしたため、連絡手段が電話からメールやSNSの利用が主になると見込まれる。こうした新たな仕組みがうまく機能するよう、慎重な運用を行う必要がある。そのほか、新規加入も３名予定しているため、既存のクラブ員との関係をうまく取り持つことも課題である。

平成 25 年度第３回圃場巡視会にて

平成 25 年度住田町産業まつりの様子

今年度は圃場巡視会の開催や、産業まつりに参加しました。また、二戸での研修など、気仙地方の外に出ての活動も行い、活発に活動できました。
来年度も活発な活動ができるよう、「元気に、健やかに」をテーマに活動していきたいと思います。

所属職名：気仙地方４Ｈクラブ副会長　　氏名：今野大樹

■　協働した機関

大船渡地方農業振興協議会　担い手部会

■　大船渡農業改良普及センター

作物・経営チーム（チームリーダー：藤原敏、チーム員：熊谷親一）
園芸振興チーム（チームリーダー：細川健、チーム員：松浦拓也、菊池紘子、島田真璃奈）
執筆者：熊谷親一

リーディング経営体の育成

【中央農業改良普及センター】

■　課題名

地域農業の担い手育成

■　ねらい

管内の農業発展には、認定農業者、さらに集落営農組織や産直といった組織等中心となる経営体とその後継者の育成が必要である。本県では地域農業マスタープランに位置づけられた地域の中心となる経営体の中から単年度経営計画の作成・実行により、年間販売額概ね3,000万円以上の達成を目標とする経営体をリーディング経営体として育成することとしている。

■　活動対象

リーディング経営体候補者　４経営体（花巻市　２経営体、北上市　２経営体）

■　活動経過

（１）４経営体共通の取り組み

ア　リーディング経営体候補者の選定

（ア）花巻市では、平成 24 年度末に機械導入志向者を手挙げ方式により募集し、応募のあった個別経営 10 経営体について市･農協等関係者と協議した。目標販売額が 3,000 万円以上の４経営体に絞り込み、市・農林振興センター・普及センター担当者で個別に面談して意向を確認し、２名を選定した。そして、再生協議会総会に諮り２名を「リーディング経営体候補者」として選定するよう助言した。

（イ）北上市では、平成 24 年度末に機械導入志向者を手挙げ方式により募集し、応募のあった３名のうち２名を選定した。北上市が再募集する意向が無いことを確認し、再生協議会総会に諮り２名を「リーディング経営体候補者」として選定するよう助言した。

イ　面談による同意確認、単年度経営計画作成支援

（ア）リーディング経営体候補者として選定された４経営体と個別に面談（市・農林振興センター・普及センター担当者が対応）し、「リーディング経営体候補者として選定されたこと」、「単年度経営計画を作成し実践すること」、「単年度経営計画の作成は普及センターと共に行うこと」を説明し、同意を得た。

（イ）後日個別に自宅を訪問して聞き取りを行い、外的環境（脅威、機会）や内的環境（強み、弱み）を引き出した。「単年度経営計画」の素案を作成し本人に確認、加筆修正後に本人へ渡し、「単年度経営計画」を基に目標達成に向け家族で十分話し合うよう助言した。

ウ　経営改善指導チーム等による四半期毎の取り組み状況の確認

当普及センターでは経営改善指導チームを設置し、四半期毎に重点支援対象への支援活動実績を検討した。リーディング経営体候補者４経営体は重点支援対象に位置づけ、四半期毎の検討は、担い手チーム並びに作物チームで検討し普及手法について協議した。

エ　単年度経営計画の目標販売額等達成状況の確認

（ア）対象４名のうち３名は普及事業パートナーになっており、毎月本人や家族から確認するとともに、担当普及員からも進捗状況を確認した。

（イ）普及事業パートナーになっていない１名は、訪問や電話で状況を確認した。

オ　翌年度経営計画の作成支援

「25 年度経営計画」の目標販売額等達成状況の確認を行いながら、翌年度の経営戦略を共に考え「26 年度経営計画」を作成した。

（２）個別の取り組み

ア　「いわてリーディング経営体育成支援事業（県単）」の申請、実行支援

北上市のＫ氏は、「いわてリーディング経営体育成支援事業」と「農業経営基盤強化準備金」の併用意向があり、「農業経営基盤強化準備金」に係るＱ＆Ａでリースへの活用を確認すると共に、花巻税務署にて納税関連を確認して、情報提供した。また、「いわてリーディング経営体育成支援事業」の申請に係る支援を、市担当者並びにＫ氏に行った。

いわてリーディング経営体育成支援事業を活用して導入した色彩選別機(左)と田植機(右)

イ　融資情報・商談会等の情報提供

（ア）北上市の法人Ａは農産物輸出を考えていたため、農商工ファンドの「いわて希望ファンド地域活性化支援事業」メニューの「起業・新事業活動支援事業」や「いわて食の大商談会 2013」の情報提供を行った。

（イ）さらに、小菊の規模拡大意向があることから、「いわて地域農業マスタープラン実践支援事業」の活用を提案すると共に、北上市にも働きかけている。

ウ　経営移譲に向けた支援

花巻市のＫ氏は、青年農業士であり父親が 65 歳になることから、平成 26 年に経営移譲を円滑に行えるよう、経営改善計画の見直し及び家族経営協定の見直しを提案するとともに、経営改善計画や家族経営協定書の写しを渡し、家族で話し合うよう助言している。

■　活動成果

（１）経営体と面談しながら戦略に基づく 25 年度経営計画を４名全員が作成した。

（２）対象４名のうち１名は、「いわてリーディング経営体育成支援事業」を活用して、農舎改善や機械導入などを実施した。

（３）対象４名のうち３名の取組み実績を把握すると共に、26 年度経営計画を作成した。

（４）法人Ａは、事業期間が３月１日から２月 28 日であり 26 年度経営計画の作成・確認はまだであるが、いわてアグリフロンティアスクールを社長夫婦で受講しており、営農計画作成シートを活用して経営計画を作成している。

（５）取り組み実績を把握できた３経営体は 100%達成した。残る１経営体は「いわてリーディング経営体育成支援事業」の活用断念、融資の見通しが立たないことから、経営改善項目「小菊の試験栽培」のみの達成となり達成率は 20%である。よって、総じて 73%となった。

自宅周辺は宅地化が進み農業後継者が少ないですが、地域の農地を集積しながら規模拡大を図り、平成30年頃には販売額3,000万円を達成したいです。家族経営協定で「経営移譲の時期は父親が年金受給する年」と決めていましたので、経営を譲り受け農業経営改善計画も見直したいです。

所属職名：花巻市リーディング経営体候補者　　氏名：　Ｋ氏

■　協働した機関

花巻市農業再生協議会、北上市農業再生協議会

■　中央農業改良普及センター地域普及グループ

担い手チーム（チームリーダー：和野重美、チーム員：中野央子、石川聡子、内田愛美）

作物チーム（チームリーダー：伊藤美穂、チーム員：畠山均、小岩央幸）

執筆者：昆野善孝

認定農業者の経営力向上支援

【奥州農業改良普及センター】

■　課題名

認定農業者等の経営高度化に対する支援

■　ねらい

農業を取り巻く情勢の変化により、農業者の中で経営改善の重要性が改めて認識されており具体的な手法について、普及をはじめとする関係機関の支援活動が必要とされている。

その中で、経営改善を目的とした中・長期計画を作成し、単年度計画等を活用して課題解決に取り組み、計画を達成するよう農業者の誘導を図った。

■　活動対象

認定農業者、認定農業者を目指す農業者、新規就農者　等

■　活動経過

（１）新規就農者経営管理研修会の開催（２回、出席者数14名）

新規就農者及び就農に向け研修中の者を対象として、研修の機会が少ない経営管理についての勉強会を平成24年度から実施している。

・パソコン簿記（エクセル版）による決算書作成の演習

・営農計画の作成ポイントについて説明

（２）かねがさき農業経営塾の開催支援（２回、出席者数18名）

農業者の経営力向上を図るため、金ケ崎町が今年度新たに開催した塾の中の「営農計画作成」の回に、講師として参加した。

・営農計画作成の考え方、経営改善に向けた中長期計画の作成方法について説明

・岩手県農業研究センター作成の「営農計画作成支援シート」で営農計画の試算を演習

※ 農業経営塾では、開校式及び閉校式での講話も農業改良普及センターが担当

（３）単年度計画作成支援

農業改良普及センター職員が、普及活動を通して支援している農業者について、単年度計画の作成及び計画実行の支援を実施した。

■　活動成果

（１）新規就農者経営管理研修会

簡易な複式簿記ソフトによる記帳演習と併せて、簿記の基礎知識についても繰り返し講義しており、出席者の理解度は高かった。

営農計画作成については、出席者は漠然としたイメージしか持っていなかったが、単年度計画に基づき作業スケジュールの進行管理を行うことで、適期作業を進めることの必要性は理解されていた。

（２）かねがさき農業経営塾

経営管理や営農計画作成について、営農計画作成支援シートを活用した試算について演習することで、理解を深めることができた。

また、簡易な経営分析の手法として、品目・年度毎の収支比較についても勉強し、毎年の経営チェックが重要との認識を得ていた。

（３）単年度計画の作成

作成した経営体においては、収量及び売上高の数値目標や実施事項を設定し、随時実施状況を確認することで、目標達成のためのツールとして活用されている。

新規就農者経営管理研修会（2/13、27）

かねがさき農業経営塾（1/16、23）

経営改善及び農業所得の向上を図っていくためには、経営状況を農業者自身が把握し、経営を分析・検討していくことが必要だと感じます。

この経営状況等確認するための手法について学びたいというニーズが農業者側でも高まり、「かねがさき農業経営塾」にも定員を超える人数の参加がありました。普及センターの幅広い農業に関する情報と深い専門知識を活用させていただいき、全８回開講できました。

日頃から町に足を運んでいただき、つながりが築かれていたので、事業実施の際も、滞りなく進めることができました。ありがとうございました。

所属職名： 金ケ崎町農林課

■ **協働した機関**

金ケ崎町

■ **奥州農業改良普及センター**

担い手・農村活性化チーム（チームリーダー：八重樫耕一、
チーム員：多田浩美、渋谷まどか、秦広和）

園芸チーム（チーム員：岩渕久代）

執筆者：多田浩美

宮古地域園芸モデル経営体の育成

【宮古農業改良普及センター】

■　課題名

担い手の育成

■　ねらい

宮古地域の核となる農業の担い手を確保するため、規模拡大や複合化、技術革新等により販売額1,000万円以上をめざす園芸のモデル経営体を育成する。

■　活動対象

経営改善意欲の高い管内園芸担い手農家４戸

■　活動経過

（１）経営発展モデル実証

ア　実証農家の選定

若手の担い手を中心に、園芸品目を経営の基幹品目とし、規模拡大や経営改善意欲が高く、地域への波及効果の高い経営体を選定した。

イ　モデル実証

選定した経営体について、それぞれ規模拡大や新品目導入等の実証目的を設定し、これらに沿った形で実証を行う農家に対し支援した。

（ア）実証農家①

実証内容：きゅうりへの雇用導入による単収向上及び冬期品目（促成アスパラガス）を導入し冬期間の所得確保を図る。

・きゅうり整枝、摘葉管理による収穫期間の延長と定植間隔拡張による栽培環境と作業効率の改善

・促成アスパラガス親株の育成、掘り取りとハウスへの伏せ込み

（イ）実証農家②

実証内容：パイプハウスを設置し、契約栽培品目で単価が安定している「こくみトマト」栽培に取り組み、経営安定を図る。

・６月中～下旬に苗を定植し、９月～10 月に収穫ピークを合わせる管理を行う。

（ウ）実証農家③

実証内容：だいこんの規模拡大と病害虫対策の徹底により単収向上を図る。

・殺虫剤（粒剤）の全面処理によるキスジノミハムシの防除を徹底させる。

（エ）実証農家④

実証内容：林間畑わさびの規模拡大と促成根みつばの複合経営により周年経営の確立をめざす。

・寒冷紗を活用した畑地におけるわさび栽培の試み

・促成根みつばの導入による冬期間の所得確保

■　活動成果

（１）実証結果

ア　実証農家①

きゅうりの摘葉作業を雇用により実施し、重要な管理作業（整枝・防除・収穫等）に家族労力を集中させることで、樹勢が維持され10月中旬まで収穫でき、また単収は管内平均

を大きく上回った。

また、定植間隔の拡張（60cm→80cm）により、栽培環境と作業性が改善され、拡張前と同等の収量が得ることができ、省力・低コスト栽培が可能となった。

促成アスパラガスは、親株を養成したが、畑の地力不足により充実した親株が得られなかったことから、地力向上により、充実した親株の確保をめざす。

イ　実証農家②

「こくみトマト」の栽培は初めてであり、良好な草姿がイメージできなかったが、収穫時期は８月29日から10月24日まで確保することができた。

トータル収量は目標に達しなかったが、日別出荷量のピークは９月中旬で、ピーク時の日別出荷量は目標単収の67kg/日をやや上回るとともに、定植順に単収向上しており、技術向上も見られた。

ウ　実証農家③

だいこんの作付圃場を20a拡大（計150ａ）するとともに、キスジノミハムシの防除対策として殺虫剤（粒剤）を播種時全面土壌混和に変更し、生育期の防除回数を２回から３回に増加することにより発生が激減し単収が向上した。

【だいこん実証（岩泉町）】

エ　実証農家④

林間畑わさびは、畑地造成を行いながら作付面積を増加させた。45ａを定植し、生育は良好である。また、前年定植40ａのうち、年内に収穫した35ａ分の地下部（芋部）の生育は良好であり、販売額は前年を上回った。

残り５ａは、促成栽培を行い３月より出荷しており、冬期間の労働力活用と所得向上が期待される。

寒冷紗を活用した畑地わさびは、生育が思わしくなく栽培を断念した。

促成根みつばについては、除草剤の薬害により枯れ上がり、株を確保できなかったことから、除草剤のより安全な使用について留意する。

（２）成果

１実証農家については、販売額目標に対し極めて低かったものの、他の３農家については前年度を上回るとともに、目標対比で67～96％の結果となり、販売額の増加に弾みがついた。

関係機関等の協力を得ながら、だいこんの規模拡大と単収向上に取り組み、一定の成果を上げることができました。

今後も、規模拡大とともに、他の土地利用型作物（にんじん等）との輪作を組みながら良品生産に努め所得の向上を図っていきたいと考えています。

氏名：　岩泉町　山崎　司

■　**協働した機関**

沿岸広域振興局農林部宮古農林振興センター、新岩手農業協同組合宮古営農経済センター

■　**宮古農業改良普及センター**

担い手・農村活性化チーム（チームリーダー：大井祥子、チーム員：安藤義一、奥平麻里子）
園芸振興支援チーム（チームリーダー：佐々木真人、チーム員：西舘孝治、小原善一、高橋大輔）
執筆者：安藤義一

集落営農組織の支援手法改善サイクル構築

【中央農業改良普及センター】

■　課題名

集落営農組織の経営高度化の促進

■　ねらい

平成 24 年度まで県域普及グループが主催した、「集落営農経営力向上講座」の中で現状分析から合意形成、経営計画作成、経営方針説明といった一連の手法を体系的に整理し、多様な課題に対応可能な手法として提示した。一方、これまで現地において独自に実践されてきた支援手法の体系化や共有化、継承が課題となっており、各普及センターの実際の指導資料を収集し、上記講座の手法と統合し体系化する必要があった。

このことから、各地域の普及センターの企画運営による集落営農組織を対象とした講座において、これまで県域普及グループが提示した支援手法と各普及センター指導資料を現地で実際に使用し実用性を高めながら、新たな支援「マニュアル」として取りまとめるとともに、この「マニュアル」を毎年度、加除修正する仕組みを構築し、ノウハウの共有・実践・見直しを重ねる「改善サイクルの強化」を図ることとした。

■　活動対象

（１）各農業改良普及センター（中央地域、盛岡、八幡平、奥州、一関、大船渡）

（２）上記が企画運営する講座を受講する、組織運営の合理化に向けた合意形成や法人化に向けた準備を進めたいとする組織のリーダー・役員等

■　活動経過

（１）集落営農経営力向上講座

「集落営農経営力向上講座」の開催形態を各普及センターが企画運営する現地講座形式に移行し、昨年度までに提示したテキストを現地講座に活用し、実践的に改善を行った。

また、改善を行ったテキストなどの資料をマニュアルの収録候補資料とした。

（２）マニュアル作成に向けた資料収集

６普及センター（中央(県域・地域)、盛岡、八幡平、奥州、一関、大船渡）からなる普及指導員調査研究専門部会「集落営農組織支援手法の共有・実践・見直しサイクルの検討」を設置、現地講座テキストを含む各普及センターの現地指導資料などを収集し、この収集資料から、各普及センター担当者が「マニュアル」収録ファイルを選定した。

平成 24～25 年度に各普及センターから提供され収集したファイルは、計 146 ファイルとなり、この中からマニュアル収録 75 ファイルを選定した。

（３）マニュアルの作成と改善サイクルの構築

「永続的に地域農業を担う集落営農組織育成の推進マニュアル」として完成、各普及センターなどへ配布することとし、今後の更新について、平成 25 年度新技術普及活等検討会で次のとおり決定した。

ア　資料の収集

別途実施する指導資料収集と併せて各普及センターの資料を毎年度収集する。

イ　「マニュアル」の更新について

収集した資料は、以下、マニュアル第１章～第 10 章、別冊農事組合法人設立資料、付録資料に分類し、新技術・普及活動検討会を経て、更新などの管理を行う。

第１章	経営意向アンケート調査の実施
第２章	集落の現状調査の実施
第３章	農林業センサスの活用
第４章	経営ビジョンの策定
第５章	経営計画作成に向けた集落営農組織の発展状況の確認
第６章	経営計画の作成
第７章	行動計画の作成
第８章	経営方針などの説明
第９章	実践に向けた行程表作成
第 10 章	生産・労務管理の仕組みづくり
別　冊	農事組合法人設立に係る資料集
付　録	過去マニュアルや経営関係ソフトなど

■　活動成果

（１）現地講座の開催などを通じて、各普及センターが実際に集落営農組織の支援のため作成し使用している資料を収集し、(S)PDCA サイクルの各項目別に体系的整理を行い統合した。

（２）経験則や仕事のノウハウに属していた支援手法・ツールを、「永続的に地域農業を担う集落営農組織育成の推進マニュアル」として文書化し、県全体の手法・知識として共有化し活かす仕組みを構築した。

また、今回のマニュアルは、掲載内容の全てを電子媒体化（文書ファイル等）して利用者が加工利用できるファイル集として編集した。

（３）なお、今後、各普及センターが連携し、「マニュアル」更新をするとこにより、知識の共有・実践・見直しを重ねる「支援手法改善サイクル」の強化が期待される。

(マニュアル収録資料を活用した現地講座受講者アンケート結果から抜粋)

・自分たちの組織の弱みがわかり、ビジョンを描くことの大切さがわかった。

・実際に経営試算でき、今後の具体化に役立つ。

・はじめは法人化の構想もはっきりしなかったが、回が進みこれから取り組むこともはっきりした。

(現地講座を企画運営した普及指導員の意見)

・集落の現状分析から行うことで、その後の合意形成、経営計画作成に効果があった。

受講者：平成 25 年度集落営農経営力向上講座(中央･盛岡･八幡平･奥州･一関･大船渡普及センター)

■　協働した機関

各農業改良普及センター（中央地域、盛岡、八幡平、奥州、一関、大船渡）

■　中央農業改良普及センター県域普及グループ

経営・農村起業チーム（チームリーダー：佐藤嘉彦、チーム員：櫻田学､三保野元紀）

執筆者：櫻田学

集落営農組織の法人化支援

【中央農業改良普及センター】

■　課題名

水田農業の構造改革

■　ねらい

集落営農組織の経営発展の手段として法人組織への移行があるが、各組織では法人化の研修を受講しているものの法人化の決断ができずに期限の延長を行っている状況である。そこでここ１～２年で法人化の意向のある集落組織を重点化し、法人設立に向け支援する必要がある。

成熟度の高い集落営農組織の経営発展のため、法人化情報の提供や相談活動を行って意識醸成を図り、法人設立を支援する。

■　活動対象

更木担い手生産組合、臥牛営農組合、八天営農組合、更木アグリ生産組合

■　活動経過

（１）集落営農経営力向上講座を通じた意識醸成

平成23～24年度は２ヵ年にわたり、４つの営農組織のうち1つの営農組合に対して、中央農業改良普及センター県域普及グループ（農業革新支援センター）主催の集落営農経営力向上講座受講を通じて、組織の現状分析、経営ビジョン作成、経営計画の作成手法経営計画実践プログラム作成指導を実施し経営ビジョンの共有を図った。

（２）圃場整備事業に合わせた法人化支援

平成23年度は、平成15年度から始まった基盤整備事業地区における１つの生産組合の法人化に向け、県関係機関との連携により、法人化の事例研修や法人設立のために担い手との意見交換を行った。

（３）４つの営農組織合同による法人設立に向けた検討支援

平成24～25年度は、４生産組合長会議で4つの営農組織による法人化の話題が出たことをきっかけに、４つの営農組織合同会議や法人化検討会、法人設立発起人会で、法人設立までのスケジュール決定や、法人設立の合意、組織体制、設立総会準備、農業機械の事業継承の検討支援を北上市や県農林振興センターと協力し行った。

■　活動成果

（１）４つの営農組織による１つの法人設立

ア　新たに設立された法人は、構成員111戸で、水稲を中心に大豆、小麦、そば、たまねぎ、レタス、ミニトマト等を組み合わせた経営面積129haに及ぶ集落の枠組みを越えた行政区単位の法人組織となった。

イ　中央農業改良普及センター県域普及グループとの連携により、集落営農経営力向上講座の受講を通じて、営農組織役員の法人設立の意識醸成を図ることができた。

ウ　４つの営農組織それぞれに行った法人設立の検討支援の結果、同じ行政区内で同時期に法人化の検討支援を行っていたことなどにより、各営農組織役員の意識が４つの営農組織をそれぞれ法人にする意識から１つの法人にしようとする意識に変わった。

エ　法人設立に向けた話合いの検討は普及センターが中心となり支援し、設立登記の手続き指導は県農林振興センターが中心となり支援を行った。また、農地の利用権設定の手続きは、北上市が中心となり支援を行うなど、支援内容ごとに中心となる支援組織を明確にした関係機関の連携により４つの営農組織による１つの法人を設立することができた。

オ　法人としての営農活動が定着できるよう、関係機関によるフォローアップ活動が今後も必要である。

（２）法人設立を契機に新たな分野への挑戦

ア　法人設立後、新しい分野への挑戦として、産直設置等のため、法人役員を構成員とした別会社を設立し、産直設置に向けた取り組みを始めた。

イ　その中で、地域振興も含めた活動に展開できるよう検討を重ねているので、農業分野にとどまらない各分野からの支援が必要である。

集落営農経営力向上講座受講の様子

法人設立総会の様子

４つの営農組織がそれぞれ法人設立を目指していたが、営農組織の合同会議がきっかけとなり、１つの法人設立の構想が、関係機関の支援により、形あるものにすることができた。法人としての営農活動がこれから本格的になるので、法人としての経営を早期に定着させて、将来的には地域振興を含めた法人経営に展開させていきたい。

所属職名：農事組合法人　さらき　　氏名：山口典男

■　**協働した機関**

北上市、北上市農業委員会、花巻農業協同組合、県南広域振興局農政部花巻農林振興センター、北上農村整備センター、中央農業改良普及センター県域普及グループ

■　**中央農業改良普及センター地域普及グループ**

担い手チーム（チームリーダー：和野重美、チーム員：昆野善孝）

園芸チーム（チーム員：佐藤千穂子）

執筆者：和野重美

集落営農組織の育成

【中央農業改良普及センター】

■　課題名

集落営農組織の育成

■　ねらい

集落営農組織は、任意組織が多く、永続的な地域農業の担い手になりえていないことから、法人化への移行も含めて営農・経営基盤の強化を誘導する。また、集落営農組織の発展段階として、園芸品目導入など経営の多角化による収益性の向上も求められていることから、経営能力向上のための情報提供を引き続き実施する必要がある。

農家の高齢化が進む中、担い手不足が顕在化している集落があることから、集落内の話し合いを進め組織化へ誘導する取り組みが求められている。

■　活動対象

遠野市内集落営農組織（21組織）、２地域

■　活動経過

（１）集落営農組織の円滑な運営支援

ア　集落営農実践塾の開催

（ア）集落営農の経営多角化研修（H25.８/28、北上市、奥州市、20名）

（イ）集落営農の園芸導入等の研修（H26.１/21～22、花巻市、30名）

（ウ）集落営農の労務管理研修（H26/１/29、農業会議と共催、20名）

イ　集合研修等への参加誘導

（ア）集合研修等への参加誘導（鳥獣害対策研修、大豆栽培研修、直播栽培研修等）

（イ）土淵地区営農組合の法人設立、運営支援、役員会支援（４月～１月まで、合計25回）

（ウ）集落営農の特定課題研修（９月、迷岡営農組合、土淵営農組合）

（２）集合営農組織の経営発展モデルの育成

ア　耕畜連携型の水田営農モデル育成（サンキュー営農組合）

巡回、アスパラガス栽培支援

イ　園芸品目導入など多角化水田営農モデル育成（新爪営農組合、迷岡営農組合）

巡回、組合独自の法人研修実施支援、タラの芽栽培指導、大豆栽培指導、地域のシカ柵設置支援

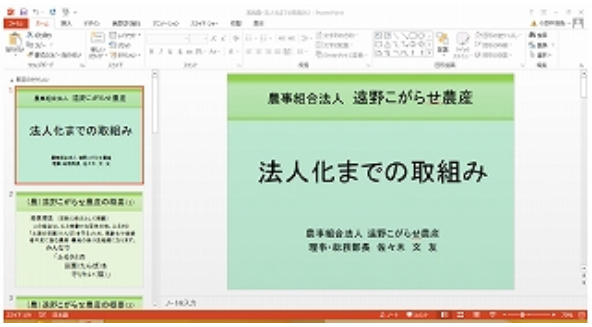
（３）集落営農の体制づくり支援

ア　荒屋集落（附馬牛　11/16、25名）、長野集落（小友　10/26、２名）

イ　地域マスタープラン地区検討会への参画（８/28～９/17、11ケ所、175名）

■　活動成果

（１）今年度、遠野市では９年ぶりに集落営農型の法人組織として（農）遠野こがらせ農産が、土淵地区営農組合から発展的に設立された。遠野地方集落営農実践塾は、計画どおり３回開催し、園芸導入の先進事例研修、法人化までの取り組み研修、農作業安全研修等を企画し、市内集落営農組織活動の活性化が図られた。



（農）遠野こがらせ農産の設立総会
（H25. 10）

（農）遠野こがらせ農産による取組み紹介
（第2回 遠野地方集落農業実践塾、H26. 1）

（２）集落営農実践塾での視察研修や講義による研修を参考にして、大豆等の栽培では省力安定生産の取り組みが浸透してきている他、農協の園芸推進品目等の導入を検討している営農組織もでてきている。

先進大豆栽培事例の研修
（第1回遠野地方集落農業実践塾、H25. 8）

園芸導入事例の研修
（第2回 遠野地方集落農業実践塾、H26. 1）

いろいろな研修や先進経営体への視察に参加しているうちに、集落営農組織の法人化に向けた取り組み意識が高まり、法人組織設立まで到達することができた。今考えると、役員の意識共有のための「経営理念づくりの研修」と、「税理士への個別相談」が非常に役立った。また、地域への説明も丁寧に行うことを心がけた。法人運営はこれからが正念場と思っている。

所属職名：（農）遠野こがらせ農産　理事・総務部長　　氏名：佐々木文友

■ 協働した機関

遠野農林振興センター、遠野市、花巻農業協同組合遠野地域営農センター、土地改良区、中央農業改良普及センター県域普及グループ

■ 中央農業改良普及センター遠野普及サブセンター

耕畜連携チーム（チームリーダー：小田中浩哉、チーム員：長澤亨、石関啓志）
執筆者：小田中浩哉